

2024 年度 学位論文（博士）

共同体構築における触媒としての芸術

—地域芸術活動もたらす「儀式感」を中心に—

Art as a catalyst in community building : focusing on the "sense of ritual" brought by
community art activities

京都芸術大学 大学院

芸術研究科 芸術専攻

氏 名：胡藝航

本文目次

序論	1
第1章 共同体構築の触媒としての芸術	8
第1節 触媒について	8
第2節 共同体構築過程における触媒要素の必要性	10
第3節 芸術が地域共同体構築の触媒となる可能性	14
まとめ	18
第2章 地域芸術活動における「儀式感」の生成と作用機制	19
第1節 地域芸術活動において生成される「儀式感」	19
第2節 日常生活における「儀式感」の形成モード	22
まとめ	26
第3章 「儀式感」の変容と地域共同体構築への影響：大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレを事例に	28
第1節 第一段階：受動的な芸術制作への参加に基づく一時的な共同体の形成	28
第2節 第二段階：芸術家との協働に基づく芸術制作により持続的な共同体の形成	31
第3節 第三段階：住民が能動的に行う芸術活動に基づく内発的な共同体の形成	35
まとめ	40
第4章 「儀式感」の変容と地域共同体構築への影響：他事例における仮説検証	42
第1節 BEPPU PROJECT	43
第2節 かめおか霧の芸術祭	48
まとめ	51
第5章 「儀式感」の作用：貴州での実験と検証	54
第1節 貴州省ヤオグにおける活動展開の背景	55
第2節 活動実施経緯	57
第3節 貴州事例における儀式感の段階的過程の検証及び考察	60

まとめ	64
終章	67
注	69
参考文献	73
資料一覧	79
資料	80
図版一覧	90
図版	91
発表論文リスト	96

序論

現代社会において、急速な都市化は経済の飛躍的成長をもたらし、人々の生活水準と居住環境を向上させた。しかし、生産と生活の合理化・効率化を絶対的目標とするこの現代化発展モデルは、地域発展に課題をもたらしている。社会発展の過程で、地域は資源流出と発展機会の不均衡という問題に直面している。OECD 諸国のデータによると、2040年までに大都市圏地域の居住人口割合は66%から67%に微増する一方、非大都市圏地域では18%から17%に減少すると予想されている。持続的かつ急速な人口の都市への移動に伴い、地域資源が大量に流出し、地域の衰退を加速させている。特に15—29歳の若者は全体の地域間人口移動の半分以上を占め、教育機会や職業機会を求めて大都市圏へ移動している。広大な地域が、伝統的農業経済の衰退、深刻な人口高齢化、そして空洞化の困難に直面している。OECD28 か国のデータでは、2016年から2019年にかけて、大都市圏地域では人口1万人当たり10.5人の転入超過がある一方、非大都市圏では人口1万人当たり10人の転出超過となっており、この傾向が地域の空洞化をさらに加速させている。非大都市圏地域では最も高齢化が進展すると予測され、2040年までに65歳以上の高齢者人口比率が29%に達すると予想されている¹。これにより、地域は次第に疲弊し、既存の共同体における人間関係が崩壊し、社会構造が変化している。住民は徐々に都市生活を志向するようになり、既存の地域共同体は活力を失いつつある。

同時に、グローバル化の進展と情報伝達の向上により、社会的価値観に顕著な変化が生じている。第7回「世界価値観調査」のデータ分析によると、人々の生活における「余暇時間」の重視度は一般的に高く、調査対象となった77カ国・地域すべてにおいて、その重要性は54%を超えている（日本では91.4%に達する）²。日本に関しては、博報堂生活総合研究所の長期時系列調査「生活定点」によると、「仕事が好き」「会社への忠誠心」などの価値観は世代交代とともに継続的に弱まっている。若い世代はより個人生活を重視し、家庭と個人の発展の重要性が仕事や組織を上回っている。この価値観の変化は1970年代以

降に生まれた世代において特に顕著であり、「個人生活が組織よりも重要」という理念が深く根付いている³。

一方、都市の緊張した生活は、人々に田園生活への郷愁と憧れを再び抱かせている。週末や休日に地域を訪れ、都市とは異なる生活を短期間体験し、その地域の「交流人口」となる人々が増加している。二地域居住・地方移住などの生活様式が生まれ、都市生活のストレスを緩和し、自然に親しみたいという内なる欲求を満たしている。国土交通省の2021年の調査によると、二地域居住と地方移住に関心を持つ人々の割合は新型コロナ以前の9.2%から12.9%に上昇しており、この新しい生活様式が多くの人々に支持されつつあることを示している⁴。この傾向は、人々の地域への関心を徐々に高めている。

このような社会的背景の影響下で、地域発展の不均衡は必ずしも人々が自らの地域をより経済的に有利な場所を求めて「放棄」したことに起因するのではなく、都市と比較して、地域に適切な「生活の場」が欠如していることに起因する可能性がある。ここでいう生活の場とは、単に人々の生存に必要な物質的生活空間を指すのではなく、精神的価値を実現できる心理的ニーズの空間をも含む。したがって、地方の衰退に直面する現状において、外部資金に依存した経済活性化に固執するのではなく、人々と地域との繋がりを再構築し、住民の地域帰属感を高め、地域の持続的発展に適した新たな共同体を構築することに焦点を当てるべきである。この新たな共同体は、多様な背景と価値観を包含し、異なる世代や追求を持つ人々に自己実現の場を提供することで、地域に新たな活力と可能性をもたらすことが期待される。

20世紀60年代から70年代の北米芸術界において、ランドアートやミニマリスト彫刻等の芸術形式の誕生に伴い、芸術は特定の空間との密接な関係に注目し始めた。これにより、サイト・スペシフィック・アート（Site-specific Art）の概念が出現した。ミウォン・クォン（Miwon Kwon）はサイト・スペシフィック・アートの概念分析において、現在の地域に入り込む芸術は、芸術作品自体の形状を超えて「場の概念は具体的な物理的位置から離れている⁵」と指摘する。初期の作品は物理的な空間との融合が強調されていたのに対して、

近年では地域社会、文化、経済といったものへの相互作用に焦点を当てている。芸術が共同体のコミュニケーションと凝集力に重要な貢献をすることが徐々に認識されるようになった。この認識は、芸術家たちに作品と共同体との相互作用をより考慮させ、芸術の地域への介入を注目される実践方向へと推進した。

日本では、1980年代からサイト・スペシフィック・アートを中心に、芸術家の視点と地域環境が融合し、新たな地域文化資源が創出されてきた。現在、地域芸術は実体的な作品にとどまらず、参加型活動を含む幅広い形態へと発展し、地域の日常生活と密接に結びついている。「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」、「瀬戸内国際芸術祭」、

「あいちトリエンナーレ」などの国際的イベントは、この傾向を代表する例である。このような芸術を通じた地域活性化モデルは、長年の成功を経て日本の文化的取り組みとして確立され、日本国内だけでなく、中国を含むアジア諸国にも広く影響を及ぼしている。日本における芸術介入の変遷を分析し、代表的な成功事例を検証することで、新たな地域共同体構築を促進する芸術活動の知見を得ることができる。これは、他地域での芸術実践にも有益な示唆を与えるだろう。

この観点から、筆者は2022年より日本の地域芸術活動の参与観察を開始した。その結果、多くの地域で芸術活動が住民の新たな集団活動として定着していることが明らかになった。さらに注目すべきは、人々が地域芸術活動を伝統的儀式と関連付け、現代社会における新たな「儀式」行為として捉える傾向が見られたことである。この現象は、芸術活動が地域社会に果たす役割の変容を想定された。

地域共同体と芸術との関係についての先行研究として例えば、吉澤弥生は日本における地域芸術活動の傾向をふまえて「その芸術創造のプロセスは多様な価値の存在を示すだけでなく、従来の組織形態だけでは実現しなかったような様々な世代・立場・考え方の人たちのつながりをつくるという、新しい公共性のかたちをも示している⁶」と指摘する。山崎亮は「コミュニティデザイン」という概念を提唱し、地域における芸術活動の役割は「モノはつくる」ことではなく、地域住民の協働によって「絆」をつくることであり、

「地方や人を元気にする」ことを強調した⁷。

これらの研究は、芸術と地域が結びつく過程において、芸術はもはや人々の唯一の関心事ではなくなっている可能性を示唆している。住民が芸術を受け入れる態度は、必ずしも芸術そのものへの理解や愛好に起因するものではなく、むしろ芸術が彼らの日常生活に対する認識に実際的な変化をもたらしたことに由来すると考えられる。

グラント・ケスター（Grant H. Kester）は実際に行われた参加型芸術活動の事例を分析した上で、さらに踏み込んだ見解を示している。彼は、人々が実践行動に参加することで「権力と主観性との構造についての新しい、これまでの規範とは異なる洞察を生み出す能力⁸」が湧いてくると指摘している。これにより、人々は生活を再考し、生活に対する客観的な省察を生むことができるとしている。向麗もまた、芸術によってもたらされる住民の感性的な認識の転換を認識し、地域への芸術の介入は「農村地域の儀礼秩序と倫理観を回復させる⁹」ことができると示唆している。渠岩は「農村地域の主体的な価値を確立すること¹⁰」が現在の地域の文明の復興において重要な目標であると述べている。これらの先行研究、芸術活動に参加する過程における住民意識の転換に注目しており、住民が獲得するものが従来の芸術作品がもたらしたものとは異なる、ある種の新たな意識だということを示唆する。

この「新たな意識」は論理的には理解されているようであるが、具体的に何であるかについては、先行研究では明確に言及されていない。筆者は、ここでいう「新たな意識」が、近年中国のSNSで流行している「儀式感」という言葉に類似しているのではないかと考えている。儀式感とは、人々の衝動的な欲望の追求から豊かな内面的精神意識の養成へと向かう儀式化された心的状態を示している¹¹。具体的な使用例としては、「儀式感が生活をただの生存ではなく、生きがいある生活にする¹²」という言及がよく見られ、日常生活への影響が強調されている。したがって、筆者は内面的な精神の変化を表現する「儀式感」を地域芸術活動研究に導入することで、人々が地域芸術活動に参加することで生じる新たな意識をよりの確に表現できるのではないかと考えている。

そして、地域芸術活動が儀式感を生み出す過程においては、地域の各主体間に新たな繋がりを構築することが必要である。この過程において、芸術は接着剤としての役割を果たし、住民の自発的な参加を促進し、地域との密接な関係を強化する。この連結作用は芸術活動がもはや単なる鑑賞価値を提供する実体作品にとどまらず、住民の自発的な参加を促す「触媒」としての役割を果たすことで、人と地域との密接な結びつきを強めていることを示している。この「触媒」という概念は、ウェイン・アトネ（Wayne Attoe）とドン・ローガン（Donn Logan）が『アメリカの都市建築—都市の設計における触媒』（American Urban Architecture — Catalysts in the Design of Cities）の中で「都市の触媒」（Urban Catalysts）として提唱したものである。この本の中で、彼らは触媒の定義を次のように示している。

都市の触媒は、機能的な問題を解決したり、投資を創出したり、快適性を提供したりすることよりも大きな目標を持っている。触媒は街によって形作られる都市の要素であり、またそれは逆に街の文脈を形作りもする。その目的は、地域構造の持続的かつ漸進的な改革を促すことである。そして重要なのは、触媒は最終製品ではなく、その後の地域発展に刺激を与え、導いてくれる要素である¹³。（論文執筆者訳）

以上の理論に基づき、筆者は、芸術活動が表向き、住民を集め、伝統文化を活性化し、地域文化資源を創出し、地域の景観を作り出し、地域内外の仕組みを構築する手段であると推測する。しかし、その本質を究めれば、このような儀式的な芸術活動が人々にもたらすものは、美術鑑賞やショッピング、映画観賞といった一時的な息抜きの満足ではない。むしろ、既存の地域生活に基づいて、住民の生活を見直すきっかけとなり、新たな意識すなわち本稿でいう「儀式感」を生み出すのである。筆者は、芸術活動が地域共同体構築の触媒として機能する過程において、この新たな意識こそが共同体の発展を支える持続的な推進力になると考える。そこで、本稿では「儀式感」の視点から、芸術活動が住民の日常生活のリズムをどのように変容させ、人々に日常生活に対する「儀式感」を喚起するかを

詳細に分析する。さらに、「儀式感」を通じて地域と住民のつながりが強化され、新たな共同体を構築できる可能性を探る。最終的には、地域芸術活動が今後の人々の日常生活に与える影響を踏まえ、持続可能な新たな人と地域の関係構築に向けた合理的な予測を試みる。

本論文は5章から構成される。第1章では、ウェイン・アトンとドン・ローガンが提唱した「都市の触媒」概念を参考に、地域共同体構築に必要な触媒概念を提示する。さらに、アグネス・ヘラー (Agnes Heller) の『日常生活』で提唱された共同体構築理論に基づき、人々の意識と共同体構築の関連性を理論的に分析する。最後に、日本の地域芸術活動の変遷を分析・整理し、芸術が地域の新たな共同体構築の触媒となる可能性を探る。

第2章では、本研究で提唱する「儀式感」の概念を紹介する。ジェーン・エリン・ハリソン (Jane Ellen Harrison) の芸術と儀式の関係理論に基づき、地域芸術活動が人々の日常生活において内面的・精神的な意識変容をいかに引き起こすかを探究する。また、アルノルト・ファン・ヘネップ (Arnold van Gennep) の通過儀礼理論を参照し、この積極的影響の源泉を考察する。これにより、地域芸術活動における「儀式感」の概念を概観する。

第3章では、最も長期にわたり継続的な影響力を持つ「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」を主要な研究対象とする。その開催過程における芸術と地域住民の関係性の変化を基に、「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」が形成する「儀式感」とそれに影響される共同体の変化傾向を分析・総括する。さらに、芸術が人々に儀式感を生み出し、新たな共同体構築を促す変化について、三段階の変化傾向に関する仮説を提示する。

第4章では、筆者が2022年から実施している日中の地域芸術活動に関する現地調査（ボランティア、プロジェクト責任者、住民との交流から得た一次資料）を踏まえ、芸術が儀式感を通じて新たな共同体構築を促す変化について、三段階の変化傾向に関する仮説を提示する。この仮説を日本の他の地域芸術活動に適用し検証を行う。そして、芸術が新たな共同体構築を促す過程における儀式感の変化と共同体の変化に関する理論を総括する。

第5章では、筆者が中国貴州省の少数民族村落・尧古村で実施した実際の地域芸術活動に基づき、日本で行われている芸術祭とは異なった経済的・文化的条件下での応用可能性を検証したい。また、参加者へのインタビューを通じて、活動過程で発見された課題を省察する。最終的に、日中両国の地域芸術活動の展開状況を比較した上で、地域芸術活動が触媒として機能し、「儀式感」の生成を通じて新たな共同体構築を促進する合理的な予測を総括し提示する。

第1章 共同体構築の触媒としての芸術

第1節 触媒について

触媒（Catalyst）とは、化学反応を表す言葉である。他の物質と接触したときに、その物質の分解または化合を促進する化学反応を引き起こしながら、自身は消耗しない物質を指す。一方、触媒の作用とは、反応の際に触媒物質が他の被反応物質に働きかける度合いを意味する。また、触媒物質の反応効率を高めたり、促進したりするよう調整することも可能である。この用語は1835年、スウェーデンの化学者イェンス・ヤコブ・ベルセリウス（Jöns Jacob Berzelius）によって初めて造られた¹⁴。その後、この概念は化学以外の分野にも導入され、都市計画にも顕著な影響を与えることとなった。

20世紀のアメリカは、産業化による急速な経済成長により、ヨーロッパに代わって科学・技術・文化の中心地となった。しかし、都市中心部への大規模な人口流入は都市機能の飽和状態を引き起こし、雇用機会の不足、環境悪化、土地資源の不足などの問題を生じさせた。この状況を背景に、産業は郊外へ移転し、富裕層もより良い生活環境を求めて郊外へ移住した。この外向きの流動傾向は都市部の経済の継続的な悪化を招き、貧困層は都市中心部に集中し、「スラム街」を形成した。行政は都市施設の維持管理のための資金も不足し、都市部の衰退はさらに深刻化した。このような状況に対応するため、1949年7月、アメリカ連邦行政は「Housing Act of 1949」を制定し、都市の衰退に歯止めをかけようとした。

アメリカの都市更新は当初、独自の理論的基盤を欠いており、多くの建築家は欧州のモダニズム設計理論を参考にした。例えば、ルイス・ヘンリー・サリヴァン（Louis Henry Sullivan）は「Form ever follows function（形態は常に機能に従う）」を提唱し、建築設計は機能を主導とすべきだと強調した。ル・コルビュジエ（Le Corbusier）は「住宅は住むための機械である」という考えに基づき、機能別に都市区域を分類することを提案した¹⁵。しかし、これらの方法は都市の複雑性と多様性を無視し、都市の同質化を深刻化させ、アメリカの

都市のアイデンティティを損ない続けた。次第に、ローカライズされたアメリカの都市のニーズに応えられないことに気づく人が増えてきた。その結果、現地の人々はそれまでの都市計画理論を見直し、アメリカの学者たちは既存の理論を再検討し、アメリカの特徴を生かした都市計画理論を積極的に模索するようになった。1961年、ジェイン・ジェイコブス（Jane Butzner Jacobs）は、都市に「複雑に入りまじって相互支援を行う」多様性が必要であることを主張した。彼女は、この多様性が「都市生活の建設的な機能」と「社会と文明の維持・発展」に不可欠であると論じ、都市の多様性と独自性の重要性を強調したのである¹⁶。この思想は後の都市触媒理論の重要な基礎となった。理論の提案、実践、反省を繰り返すことで、アメリカは徐々に自国の特性に適した都市設計理論を形成していった。

20世紀末になると、ウェイン・アトンとドン・ローガンがアメリカ中西部の都市計画を分析し、都市計画やデザインの成功のプロセスは、「触媒」という化学的概念の化学反応に似ていることを発見した。良質の触媒効果を持つ小さな要素、例えば建築物、建築物の断片、建築物の複合体、または報告書やガイドラインなどが、都市再生に勢いを与える¹⁷。そこで、「触媒」理論をアメリカの都市計画設計に応用できると提案した。触媒理論から発展した「都市触媒」（Urban Catalysts）である。彼らは触媒の定義を次のように示している。

都市の触媒は、機能的な問題を解決したり、投資を創出したり、快適性を提供したりすることよりも大きな目標を持っている。触媒は街によって形作られる都市の要素であり、またそれは逆に街の文脈を形作りもする。その目的は、地域構造の持続的かつ漸進的な改革を促すことである。そして重要なのは、触媒は最終製品ではなく、その後の地域発展に刺激を与え、導いてくれる要素である¹⁸。（論文執筆者訳）

さらに、都市触媒の8つの特徴¹⁹を紹介している。要約すると、都市触媒の反応過程では、まずAという小さな要素を導入し、それが周囲の要素に変化を起こして新しい要素Bを形成する。新しい要素Bが形成されると周囲の環境に変化を起こし、それが都市に他の

原初要素の間に相互作用を引き起こす。要素間の相互作用が大きくなると、より大規模な触媒が形成され、それがより広い都市空間に触媒作用を及ぼし、核分裂効果のように一連の連鎖反応を引き起こし、最終的に都市の地域特性の持続的発展を実現する。

触媒の役割の焦点は、都市におけるさまざまな要素の関係性に柔軟に対応する必要があることだと理解することが重要である。矢萩喜従郎は『触媒の身体をつくる』という本の中で、触媒と周囲のものの関係について、次のように述べている。

触媒とは、二つの異なるものを作用させ、その結果として、二つの成分を変化させる力を持つもので、「触媒」という言葉こそが「関係性を誘引する」状況を連想させる、願つてもない言葉と考えたからである。「関係性を誘引する」ことに依って、人が、他者、あるいは物に対して向き合う時に、創造性を喚起させる重要な契機が生まれると推測できる²⁰。

社会の発展に伴い、従来は都市と区別されていた小規模な地域でも、その生活は徐々に都市型の発展モデルに近づいている。触媒は既存の要素を融合させ、連鎖反応を引き起こす特性を持つことから、都市計画のみならず、地域共同体の衰退問題を解決する手段としても適用できる可能性がある。以下では、共同体の構築プロセスを分析することにより、触媒概念の地域発展における応用可能性について考察する。

第2節 共同体構築過程における触媒要素の必要性

20世紀後半に活躍した新マルクス主義学者アグネス・ヘラーは『日常生活』において共同体の概念を深く探究した。ヘラーの理論は、共同体と個人の関係について二項対立的な見方を超えた新しい視点を提供している点で特に注目に値する。彼女は、共同体に所属しながらも個人の意識変化が共同体自体を変化させるという相互作用的な関係性を強調した。この視点は、現代の地域共同体構築の問題を考える上で重要な示唆を与えており、後述す

る儀式感の議論にも通じる重要な観点である。

ヘラーは日常生活における共同体を「自然共同体」と「選択共同体」に分類している。自然共同体とは、個人が生まれる前から既に定められている共同体のことである。自然共同体においては、共同体が人々の価値システムを規定している。その基本的な価値観が一般的に遵守されるべきものとして約束される。一方、選択共同体は、個人が自発的に加入した結果である。ヘラーは選択共同体について以下のように述べている：

「意識的に組織された」共同体が、与えられた社会の再生産という観点からは必要ないという事実は、その社会にとって何の関心もないということを意味しない。これらの共同体は、種的本質の平面における目的の達成に構造的に寄与し、共同体の構成員の個人的自意識を明確に表現し、価値論的平面において模範を示し、そして最後に、しかし決して重要性が劣るわけではないが、一つの生き方を提供するのである²¹。

（論文執筆者訳）

そして、二つの共同体の間にある最も大きな相違点は、人々の主体的な選択にかかわるか否かである。「自然共同体」においては、個人は共同体によって決定される存在であり、これは一方的に強制され、あるいは決定される過程である。「選択共同体」においては、個人と共同体の間の関係は相互的であり、互いに影響を与え合う過程である。これらの共同体の定義に基づき、ヘラーは「日常生活」で未来の社会の共同体の基本的な姿を次のように描写している。

個人が具体的な生活の方法を選択し、その中で特定の普遍的な共同体（または統一体となる人類）の普遍的な基準を実現することを望む共同組織を選ぶということは個人に任されている。それは全体の種的本質性を具現化する可能性のある任意の共同体を選ぶことである。それは異なる水準や方法で行われる場合もあるが、まぎれもなく、

私たちは未来の社会の共同体を、この第二のタイプの共同体に近い価値の同質性を持つものとして想像するべきである²²。（論文執筆者訳）

ヘラーの理論に基づくと、未来の社会の共同体はより「選択共同体」の形態に傾くべきであると推論できる。このような新たな共同体の構築には、人々が主体的能動性を発揮し、自主的に選択し参加することが必要となる。この点に関して、櫻井徳太郎は日常生活のリズムを調整することによって人々の生活態度を変化させる効果について以下のように述べている。

一種の生活のリズムというべきものがあって、それでふだんの生活が続いていくと、ついには、なんとなくマンネリ化し無気力になってしまう。そこで必然的に変化を求める、あるいははじめを求める²³。

この「変化」は具体的に、日常生活と非日常生活の相互作用を通じて日常生活のリズムを変え、自身の生活状態を調整することである。日常生活について、ヘラーは、「いつの時代にもある社会的再生産の可能性を創り出す個々の再生産を特徴づける、もろもろの活動の全体である²⁴」と定義している。日常生活とは、個人の生活環境や個人的な世界という「即自」の領域である。非日常生活とは、個人の再生産に基づく「対自」の社会的再生産の領域である。非日常生活は「対象化した自己完結的な領域が生活に特別な意義をもたらすのは、経験的な生活よりも上位にあるからである²⁵。」（論文執筆者訳）

熊倉純子は生活リズムにおける非日常活動の人々の日常生活への変化作用を肯定している。

日常生活の営みに対し、非日常的な営みとして挙げられるのが「祭り」である。小さな土地のなかで水を分け合い、互いに協力しながら農作物を皆で育てるために、和を

尊び自分勝手な振る舞いを嫌うムラ社会のメンタリティは、意見が対立することを避けようとする国民性に今でも根強く残っている。ムラ社会の日常は閉塞感を生み、活力の低下をもたらすが、それを打破する非日常的営みが「祭り」である²⁶。

儀式は、人々の生活変化を実現する重要な手段であり続けてきた。特に農耕時代において、人々は自然に基づいて生活し、対人関係は主に自然の生活圏における氏族や村の形で存在した。有賀喜左衛門と中村吉治は、「イエ・ムラ理論」において、当時の「自然共同体」を「家」や「同族」といった「血縁」的家集団ないし家連合を伝統的コミュニティの核としてとらえようとした²⁷。自然共同体に属する人々は非日常を求めて年中行事を行っていた。これは日常から脱却する重要な方法でもあった。

社会の発展に伴い、地域生活は人口減少、若者の流出、中心市街地の衰退などの問題に直面している。これにより、地域における文化、住民、生活空間の連携が徐々に失われ、多くの地域では伝統的な祭りや町内会活動の維持さえ困難となり、地域共同体の基盤自体が崩壊しつつある。一方、人口密集地である大都市圏は経済的繁栄を享受しているものの、人々のつながりの希薄化や孤独感の増大といった問題が浮上している²⁸。これらの要因が人々の疎外感を助長している。

このような状況下で、人々は地域の生活圏に再び注目し始めている。例えば、2011年3月11日の東日本大震災・福島第一原発事故以降、人々の人生観や家族観に変化が生じ、物質経済への関心から地域生活における「自産自消」能力や、人々の「協働」関係の再喚起へと転換している。地域生活への憧れも同時に強まっている。特に2019年末からの新型コロナウイルス感染症の流行により、リモートワークの普及で居住地と勤務地の制約が緩和され、移住のハードルが下がっている。NPO法人「ふるさと回帰支援センター」の統計によると、移住や二地域・多地域居住への関心が高まっていることが示されている²⁹。

しかし注目すべきは、人々の地域生活への関心が、単純な自然共同体への回帰ではなく、新たな形態の共同体構築を求めていることだ。現代人の理想とする共同体には、一見矛盾

する要素が含まれている。強い帰属感と情緒的つながりを求める一方で、個人の自由と自己表現の余地も保持したいという願望がある。つまり、共同体との適度な距離感を保ちつつ、帰属意識も持ちたいという複雑な要求が存在する。この新しい形態の共同体は、伝統的な自然共同体とは本質的に異なる。人々は共同体の一員でありながら、個人としての独立性も維持したいと考えている。しかし、現実の地域共同体においてこの矛盾する要求を満たすことは容易ではない。したがって、現代人が求める共同体の形態は、従来の自然共同体とは異なる特徴を持っており、その実現には新たなアプローチが必要となる。

一方で、文化的価値観の共有、特に芸術などの文化活動を通じて、これらの一見矛盾する要求を満たす可能性がある。例えば、芸術祭において、地方の権威者も一般参加者も平等な立場で参加することができる。この方式は、強力な地域の結束力と秩序を維持しつつ、外部参加者を柔軟に受け入れることを可能にする。したがって、本研究は、人々が望んでいるのは既存の地域自然共同体への回帰ではなく、新たな形態の共同体の構築であると考えている。この共同体は伝統的な村落社会の特徴を一部保持しつつも、本質的にはより開放的な形態である。このような要求に対し、既存の地域共同体は徐々にその適応性を失い、地域の持続可能な発展を阻害する可能性さえある。

前述の触媒特性に基づき、筆者は地域共同体の構築過程において触媒要素の導入を提案する。この方法は、既存の資源と特色を尊重し包含する基盤の上に、地域に新たな生活リズムを注入し、地域資源間の連鎖反応を促進することを目的としている。この方式を通じて、住民は地域の持続的発展に適した新たな形態の共同体の構築に主体的に参加し、人と人、人と地域との再連結を実現することが可能となる。この新たな形態の共同体は、現代人の強い帰属感への欲求を満たすだけでなく、個人の自由な表現と創造の場をも提供するものである。

第3節 芸術が地域共同体構築の触媒となる可能性

日本の芸術活動の変遷を振り返ると、芸術と人々の関係の変化が観察される。芸術は

徐々に日常生活に融合し、より豊かで多様な芸術形態が生まれた。芸術は単なる鑑賞の対象ではなく、住民の生活リズムに影響を与える重要な要素となったのである。

20世紀50年代—70年代：人々の日常生活環境に融合する芸術

20世紀50年代以降、世界的な「オフ・ミュージアム」運動が台頭し、芸術作品はギャラリーや美術館から解放され、徐々に人々の日常生活環境に進出した。この時期、日本では芸術作品をギャラリーや美術館から駅前、公園、道路沿いなどの屋外空間へ移す試みが始まった。1961年、日本で初めて大規模な屋外彫刻展「UBE ビエンナーレ³⁰」が開催され、彫刻作品の公募を通じて地域環境や都市景観の改善が図られた。この例に習い、1968年には「神戸須磨離宮公園現代彫刻展」が、1969年には箱根彫刻の森で「現代国際彫刻展」が開催され、1970年以降、都市景観整備と彫刻を結びつける試みが全国に広まった。しかし、これらの彫刻は制作や選択の際に設置場所の特性を考慮せず、彫刻作品と人々の生活ニーズの間に乖離が生じ、「彫刻公害」という問題さえ引き起こした。その後、芸術と日常生活の分断という問題が取り上げられるようになった。人々は物質的な生活を追求するための仕事に疲れ、物質的な側面を追求するよりも内面的な、精神的な側面に焦点を当てるようになった。古川は当時の人々の生活リズムの変化について次の指摘をした。

都市におけるライフスタイルが、生産（仕事）最優先から個性とゆとりへとシフトしていくのに合わせて、豊かな自然に囲まれてリフレッシュするためのリゾート開発が過熱していった³¹。

そのため、芸術と日常生活空間の乖離の問題が注目され始めた。柳澤有吾はこのような状況に直面し、芸術作品は「街や公共空間の『場』としての性格や意味を読み取り（あるいは積極的に付与）³²」すべきであると提言した。彼は芸術作品がその設置空間と密接な関係を築くべきであると考えたのである。

20世紀80年代—90年代：芸術の日常生活リズムへの融合

この時期、芸術作品は創作表現および住民との相互関係の観点から地域環境への融合を探究し始めた。これにより、「サイトスペシフィック³³」を中心とした芸術形態が流行し、作品鑑賞を通じて作品と周囲の環境との関係性を感じられることが期待された。その典型例として、1980年に静岡県浜松市で開催された「浜松野外美術展」が挙げられる。浜辺に展示された作品は、塩分を含む空気や強風などの環境制約を考慮し、適切な材料を選択することで周囲の環境との調和を実現した。浜松野外美術展の成功を受けて、1984年には栃木県の採石場で「大谷地下美術展」が、同年には岡山県瀬戸内海のオリーブ園を中心に「牛窓国際芸術祭」などが開催された。これらの芸術形態の変化は、芸術家の地域環境に対する尊重を示すだけでなく、住民に芸術との相互作用を体験する機会を提供した。例えば、1988年から1998年まで山梨県白州町横手・大保地区で開催された「アートキャンプ白州³⁴」がある。この活動は地元在住の舞踏家・田中泯が発起したもので、芸術内容を地元の日常的な農作業と結びつけただけでなく、芸術形式においても舞踏のパフォーマンス公演を中心に、美術、演劇、音楽、映像など様々なジャンルの表現活動がワークショップやコラボレーションといった形で地域住民の参加を促した。田中泯は前田礼や戸谷莉維婆とのインタビューで、芸術と日常生活の関係について次のように語っている。

僕はそもそも表現を日常と切り離して考えていなかったし、今でもそれは変わりません。「祭り」はまさに営みという日常の連続があるからこそ起こり得る³⁵。

田中は芸術家の視点から、芸術創作は人々の日常生活における「祭り」のようなものであり、日常生活に深く根ざし、人々の日常生活と持続的な関係を築くべきだと提言した。この理念は当時の芸術家たちの芸術と生活の境界を打破することへの関心を反映している。これは芸術が人々の日常生活リズムに影響を与える基礎を築き、芸術が地域でより積極的

かつ深い役割を果たし始めたことを示す転換点となったのである。

21世紀以降：芸術による地域生活仕組みの再構築

2000年に入り、芸術はさらに日常生活との融合を深化させた。吉澤弥生は当時の日本の芸術活動と人々の生活の密接な関係を次のように描写している。

芸術創造のプロセスは多様な価値の存在を示すだけでなく、従来の組織形態だけでは実現しなかったような様々な世代・立場・考え方の人たちのつながりをつくるという、新しい公共性のかたちをも示している³⁶。

その代表例として、2000年に新潟県で開催された「大地の芸術祭越後妻有トリエンナーレ」が挙げられる。この芸術祭は3年に1度開催され、2024年までに第9回を数えるまでに至った。芸術活動の影響下、地域には「まつだい棚田バンク」（田んぼのオーナー制度）、「NPO法人越後妻有里山協働機構」（芸術祭の運営管理を担当）、「FC 越後妻有スタート」（地域の農業耕作を支援）などの機関が生まれた。「大地の芸術祭越後妻有トリエンナーレ」の長年にわたる成功的な開催により、芸術を通じて地域資源を活用し、住民に地域に対する新たな認識を喚起し、人々と外部参加者との交流のきっかけを創出した。この変化は地域住民、行政、外部参加者などの各主体を密接に結びつけ、地域住民に属する新たなネットワークを構築した。したがって、芸術はもはや生活環境に融合した「実体」の芸術品だけでなく、日常生活の「仕組み」となったのである。これにより、新潟県のかつての辺境地域が徐々に世界的に有名な芸術の地となった。この成功経験は、日本が芸術を地域振興を促進する有効な方法の一つとして全国各地で広く推進する契機となったのである。

日本の地域芸術活動の発展過程を整理することで、芸術が地域共同体構築の触媒としての潜在力が徐々に顕在化していることが見て取れる。芸術は単なる鑑賞対象から住民の日

常生活を結びつける接着剤へと変容する過程を経験した。この過程で、芸術は環境に融合して空間を再構築するだけでなく、鑑賞対象から参加プロセスへと変化し、形式も単一から多元へと移行した。芸術活動は徐々に持続的な共同体参加メカニズムとなった。これらの変化により、芸術は新たな地域共同体を構築する触媒となり、現在の地域共同体が直面する課題を解決するための新たな視点を提供したのである。

まとめ

本章では、地域共同体構築過程における触媒要素の重要性を論じ、芸術活動が触媒として機能する可能性を提示することで、現代社会における地域共同体の構築に新たな視点を提供する。第一節では、ウェイン・アトンとドン・ローガンの「都市触媒」理論を整理し、「触媒」が既存の要素を融合させ連鎖反応を引き起こす特性を明らかにした。第二節では、アグネス・ヘラーの共同体理論に基づき、現代社会における共同体の変遷を深く分析した。その結果、将来の地域が構築すべき新たな共同体は「選択共同体」の形態に向かう傾向があり、人々の自主的な選択がその構築の鍵となることが明らかになった。同時に、現代社会の影響下で、地域の既存の共同体が現代人の共同体に対するニーズを満たせなくなっていることも指摘し、地域共同体の構築過程に触媒要素を導入する必要性を浮き彫りにした。第三節では、1950年代以降の日本における芸術と地域生活の融合の変遷をたどり、芸術が単なる鑑賞対象から住民の生活リズムに影響を与える重要な要素へと徐々に変化していることを明らかにした。この傾向は、芸術が地域共同体構築の触媒として機能する可能性を示唆している。人々の自主的な選択が芸術による共同体構築促進の鍵であることを踏まえ、次章では、芸術が人々の内面的精神意識の変容に与える影響をさらに探究し、芸術による共同体構築の理論的枠組みをより深く整理し発展させる。

第2章 地域芸術活動における「儀式感」の生成と作用機制

第1節 地域芸術活動において生成される「儀式感」

前章ではヘラーの「共同体」理論と芸術と生活の融合傾向を踏まえ、芸術を地域共同体構築の触媒とする理論的構想を提示した。芸術はもはや単なる鑑賞の対象ではなく、人々の日常生活と密接に関連している。したがって、芸術が地域共同体構築の触媒となる過程を論じる上で、芸術活動が人々の内面に与える影響と、それによって生じる新たな意識を理解する必要がある。本節では、芸術が人々の内面にどのような影響を与え、「儀式感」という新たな意識概念を引き起こすかを分析し、この概念が芸術活動がもたらす新たな意識を描写するのに適している理由を説明する。

ハリソンは『古代芸術と儀式』において、儀式が大いに恒久的な必要物であると指摘している。彼女は「多くの者、おそらくわれわれの大多数は、何らかの集団的祭式の媒体の中、文字どおり中間的場所においていっそう自由に呼吸する³⁷」と述べている。原始社会以来、儀式は思想と文化の機能を実現する重要な手段であり、宗教、民族、政治体制の確立においても何らかの儀式システムが必要とされてきた。人々は儀式を通じて集団的記憶を継承し、文化への共感を生み出す。この意味において、儀式は人々の日常生活に不可欠な部分であり、生活の至るところに関わっている。

しかしながら、現代社会の変遷に伴い、伝統的儀式の精神的意味合いは次第に表面的になり、その表現方法も必然的に形骸化している。この変化には複数の要因がある。第一に、かつての村落社会から、人々が仕事や学業のために故郷を離れる現代社会への移行により、地域共同体の構造に大きな変化が生じた。第二に、若者の帰属意識に変化が生じ、地域共同体よりも学校や職場などの他の集団への帰属意識が強くなっている。さらに、かつては仕事と生活が一体化していた生活単位が崩壊し、地域の共同体意識も同時に弱体化している。これらの要因により、伝統的儀式が行われたとしても、その本来の意味と機能は徐々に失われつつある。結果として、伝統的儀式は地域生活において次第に影響力を失ってい

る。それにもかかわらず、人々の儀式に対する需要は依然として存在し、これが現代社会において人々を自発的に現代生活に適した儀式的行為を探究させる動機となっている。

ところで今日の中国社会においては「儀式感」という言葉が近年よく使われ、活動参加後に感じる心理的变化を概括している。例えば、王晓丹は「儀式感」を、儀式あるいは儀式性のある出来事に人間が実際に参与・観覧することで、特定のコンテクストに入り、自身の認知・情感・行為の三者が一体になる時に生じた混沌的な心理状態であると定義している³⁸。崔露什は儀式感を、人々が儀式活動中に経験する感性の体験であり、美学または感性学の概念として、その意味は非常に豊かであり、美的な活動と儀式行動との美的な関係だけでなく、儀式感は複数の美的な形態を持つものと説明している³⁹。また、郭軼佳は「現代中国社会における『儀式感』の研究—高度スペクタクル社会と写真」の中で、儀式感とは、高度スペクタクル社会の中で、個人の意思によって完全な理性的思考の空間を求める欲求であり、現代人の一種の自己調節機能、自己解放活動と見なされることを明らかにしたと指摘している⁴⁰。

以上の見解は、それぞれ異なる分野からのものであるが、いずれも「儀式感」の以下のような特徴に言及している。まず、「儀式感」は、伝統的な儀式によって生み出されるものではなく、現代性によって特徴づけられるものである。次に、「儀式感」の形成は、人々が現実の日常生活と切り離された「空間」の中に入ることによって生み出されるものであり、それは日常生活に対する新たな意識が生まれることである。そして、この新たな意識は、人々の日常生活に対する態度に影響を与えるのである。

儀式感と儀式の違いは、儀式が日常生活の中で生じる集団的活動であり、活動の中で過去の生活経験や信仰を再び辿り、集団の集まりに焦点を当てているのに対し、儀式感とは参加過程における情感の発散と精神的満足に焦点を当て、人々の過去の行動に対する新たな認識となっている点にある。重要なのは、この新たな認識が人々に持続的な影響を与え、主観的に後続の生活に変化をもたらす意志を生み出すことである。換言すれば、儀式感とは人々を日常生活の視点から脱却させ、自己の生活を再考し、内面の精神性に変化をもたら

す意識上の変化である。

この意識の描写は芸術が人々の内面に与える変化と類似している。芸術が人々の意識に与える影響について、ヘラーは以下のように述べている。

芸術は人類の自己意識であり、芸術作品は常に「対自的な」種的本質の担い手である。

芸術作品は常に内在的であり、人間の世界、人間によって創造された世界としての世界を描いている。芸術の価値尺度の頂点には、種的本質の発露の過程に最も完全に入り込んだ個人（個人の感情、個人の態度）がある⁴¹。（論文執筆者訳）

上記の理論によれば、人々の内なる精神性によって日常生活に影響を与える手段として、芸術の重要性が肯定されている。そして、非日常の影響を受けて人々の意識が変化するにつれ、自らの日常を省みるようになる。山田真茂留はその変化を次のように語っている。

人は非日常的な意味空間へと一気に飛翔し、そこにおいて自らを超越する観念や存在の凄みに打たれ、そして再び舞い降りた先の日常生活世界を新たな気分で眺めることとなるにちがいない⁴²。

この文章は芸術活動における「儀式感」の形成過程を的確に表現している。ヘラーは人々が芸術を通じて感情の発散や精神的な満足を得ることを提案している。芸術が人々にもたらす新たな意識について、ヘラーは以下のように述べている。

芸術作品を享受する際、我々は私的に生きられ楽しまれた日常から出発し、自身の感情や知識の蓄積を携えてくる。しかし最も重要なのは、我々が生きることを学んだ社会の価値判断やイデオロギーを身につけて臨むということである⁴³。（論文執筆者訳）

芸術が人々の日常生活の意識を変える効果について以上の考察を踏まえ、筆者はこの芸術活動によって生じる新たな意識が「儀式感」という言葉が描写する人々の内面的精神の変容と類似していると考え。したがって、以降の論述では「儀式感」という語を用いて芸術活動が人々にもたらす新たな意識を表現することとする。

以上をまとめると、地域芸術活動が生み出す儀式感は、現代的で空間性と反省性を持つ新たな意識形態である。それは芸術活動を通じて人々の日常生活に対する再考を促し、個人に持続的な影響を与える新たな認識を生み出す。この儀式感は現代社会における人々の儀式に対する需要を満たすだけでなく、人々を通常の視点から脱却させ、内面的精神の変化を引き起こす。それは個人の感情体験に注目すると同時に、潜在的に地域共同体全体の構築にも影響を与える。芸術活動を通じて形成されるこの儀式感は、人々に自己、他者、地域との再接続の機会を提供し、地域共同体の発展を促進する重要な触媒となる。次節では、この儀式感が具体的にどのように人々の自主的变化に影響を与えるかをさらに探究し、芸術、儀式感、共同体の関係構造をより深く理解することを目指す。

第2節 日常生活における「儀式感」の形成モード

日本各地の芸術活動を実地調査した結果、筆者は興味深い現象を発見した。多くの地域では、年間の特定時期に芸術活動を集中的に開催している。これは、参加者に儀式に類似した非日常的体験を提供しようとする意図的な試みだと考えられる。北澤潤は「『もうひとつの日常』を生み出すアートプロジェクトに関する研究」において、儀礼論の視点から、芸術活動は日常生活の「小祭」であり、人々が芸術活動に参加する過程で日常とは異なる自己体験を得て、生活に対する「内省」を引き起こすと述べている。それにより、芸術活動は人々の「もう一つの日常生活」になると主張している⁴⁴。同時に、市川寛也は地域における芸術活動と儀式の結びつきについて、次のように述べている。

アートプロジェクトの多くが都市部のみならず農村でも受け入れられている背景には、共同制作の場を起点に据えた擬似的な祭りの再生があるからなのかもしれない。そこでは芸術が芸術として自立するのではなく、日常生活の延長線上において芸術に関わる機会が創出されていく⁴⁵。

また、ハリソンは芸術と儀式の関係について以下のように述べている。

古代芸術と祭式とはただに密接に結ばれているのみでなく、また相互に説明を与え互に解説するばかりでなく、やがてわかるごとく、両者は実際に同じ人間衝動から発しているのである⁴⁶。

同時に、彼女はディーテュラムボスを例に挙げ、儀式において「初めのうちは役者と見物のあいだに何らの区別がない。すべてが役者であり、すべてがなされごとをなし、踊られる踊りを踊るのである⁴⁷」と指摘している。

しかし、芸術と儀式にはあきらかに相違がある。その主要な点は「見物人」という要素の出現にある。その結果もたらされる表現について、ハリソンは以下のように述べている。

踊りは単に踊られるばかりでなく、また遠くから見物されるもの、一つの見世物である。昔はすべての者が、あるいはほとんどすべての者が、演ずる信徒であったのに、今は多くの者が、実にたいていの者が、見物人であって、見物し、感じ、考えているが行なっていない。この新しい見物人の態度のうちにわれわれは実に祭式と芸術の相異に触れるのである。ドローメノンすなわちあなたがた自らによって現実になされたことがドラマとなった。これもまたなされたことであるが、しかしあなたがたの行ないから抽象されている⁴⁸。

この「見物人の態度」の出現は、儀式と芸術の間に明確な境界線を引いている。これは集団参加型の儀式から鑑賞型の芸術への進化を示すものであり、ここでいう「見物人の態度」は前述の「儀式感」に相当する。儀式と同源の芸術がいかに人々に「儀式感」をもたらすかを議論する際、儀式の形成過程と関連付けて考察することが可能である。

アルノルト・ファン・ヘネップの通過儀礼の理論において、彼は通過儀礼が人々を人生の新たな段階へと導くプロセスを描写している（図1参照）。このプロセスは通常、3つの段階で構成されている。まず、「分離」の段階で、個人は儀式的に社会から排除され、次に「過渡」の段階で一定期間隔離され、最後に「統合」の段階で新たな地位を獲得して日常社会に溶け込む。ヘネップが強調する「過渡」の段階とは、人々が日常生活から切り離された時空の構築である。ヘネップは「過渡」の段階を次のように説明している。

聖非聖の二つの地域を通過する者は、肉体的にも、呪術的にも、一定期間、特別な状況に置かれる。つまり彼は二つの世界の間を彷徨っているのである。私がマルジュ（過渡期）と呼ぶのはまさにこの状況である⁴⁹。

この時空間では、人々は通常の社会的行動パターンから解放され、日常生活であらかじめ設定された社会的役割から離れることができる。新たな知識を得て新たなアイデンティティを受け入れる可能性がある。

したがって、上述した理論に基づくならば、地域で展開される芸術活動とは、「過渡期」を人為的に創造するものであると言えよう。そして、「過渡期」の中で参加者が日常生活を再思考することにより、日常生活に対する新たな意識が生まれ、それは参加者に与えられる芸術活動の「儀式感」となる。具体的には（図2参照）、参加可能な芸術活動が地域に介入することにより、人々は日常生活に対する一般的な意識である「常態期」から芸術活動が創造する「過渡期」へと移行する。そして「過渡期」では、芸術活動を通じて日常生活の意味を改めて解釈し、日常生活と芸術活動の境界が曖昧となる。このことを通して、

参加者はこれまで当たり前に受け入れていた日常生活を問い直し、日常生活に本来の機能や実用的な目的を超えた新たな解釈を与える。その結果、参加者は「常態期」という意識状態から脱却し、日常生活の再認識を通じて、これまでとは異なる新たな意識を創造することができる。この新たな意識が「儀式感」と言える。

しかしながら、「儀式感」は人々の主観的な認識と密接に関連しており、芸術活動への参加度が増すにつれて、儀式感と日常生活の関係は変容する可能性がある。例えば、芸術活動が人々の日常生活における非日常的な活動としてのみ行われる場合、芸術活動によって生じる日常生活への一時的な気分の変化は、活動が終了すると次第に弱まり、最終的に人々は既存の日常生活、つまり「常態期」に徐々に戻るであろう。しかし、芸術活動に継続的に参加する中で、儀式感と日常生活の関係がより深まり、相互に影響し合う状態に変化するならば、その相互作用の中で、人々の日常生活はより豊かで創造的なものへと変容する可能性がある。この状態を「創新期」と呼ぶことができる。

この過程において重要なのは、儀式感を生み出す構造が持続的に機能することである。日常生活は常に変化し、時に劣化やマンネリ化の傾向を示す。そのような中で、芸術活動を通じて生まれる儀式感は、単なる一時的な刺激ではなく、日常生活に新たな意味や価値を持続的に付与する力を持つ。つまり、儀式感が生活を変え、新たな生活がまた新しい儀式感を生み出すという、内発的で創造的な関係性が形成されるのである。この持続的に新しい儀式感を生み出す過程、すなわち「創新期」こそが、地域共同体の活性化と再構築につながる可能性を秘めている。

以上の考察を踏まえ、本章において重要な点は、地域芸術活動が住民に儀式活動が持つ集団参加性をもたらすものの、それが地域の現代生活における新たな儀式活動と完全に同一視されるわけではない点である。両者の間には一定の距離が存在する。この距離が生じる理由は、活動参加者が日常生活を再考することで、地域に対する新たな意識を生み出すためである。この新たな意識は、従来の伝統的儀式などの非日常的活動がもたらす意識とは異なり、単なる一時的な気分転換ではなく、住民の生活に持続的な影響を与える儀式感

である。筆者は次章において、実際の事例と関連付けながら、地域芸術活動が生み出す「儀式感」がいかに変容し、その変容の影響下で地域住民の日常生活にどのような影響を及ぼすかを具体的に分析する。

まとめ

本章では、地域芸術活動が人々の内面的な精神意識をどのように変容させるかを考察し、「儀式感」という核心的概念を導入する。これは、芸術が触媒として地域共同体の構築を促進する役割を理解するための理論的基盤となる。

第一節では、「儀式感」の概念を紹介し、それが現代的で空間性と反省性を持つ新たな意識形態であることを明らかにした。伝統的な儀式と現代の芸術活動を比較するなら、芸術活動が生み出す儀式感は個人に持続的な影響を与え、自主的な意識の変化を促す。この新たな意識は、現代社会における人々の儀式への需要を満たすだけでなく、人々が通常の視点から脱却し、内面的な精神の変容を引き起こすことがわかった。

第二節では、ファン・ヘネップの通過儀礼の理論を援用し、地域芸術活動を人為的に創造された過渡的段階として捉える概念を説明する。この段階において、人々の意識は一時的に日常生活から離れ、特別な空間に入る。この特別な空間では、日常生活の意味が再解釈され、参加者に新たな意識（すなわち儀式感）が生まれる。

以上を踏まえ、筆者は儀式感の形成とそれが共同体構築に与える影響を考察するために、三期のモデルを提示する。

常態期：日常生活における一般的な認知状態

過渡期：芸術活動が構築する特別な空間。日常生活の意味が再解釈され、参加者に新たな意識（すなわち儀式感）が生まれる

創新期：芸術活動を通じて得られた新たな視点や意識が日常生活に反映され、新たな生活様式や共同体意識が形成される

このモデルは儀式感の形成過程を示すだけでなく、芸術活動が「過渡期」を創造するこ

とで人々の認知と行動にどのように影響を与え、潜在的に共同体の構築を促進するかを明らかにする。注目すべきは、この影響モデルがマクロな概念に過ぎないということだ。実際の芸術活動の展開過程において、過渡期に生まれた儀式感は、創新期において日常生活に影響を与え、新たな共同体意識や生活様式を生み出す可能性がある。この過程が、地域共同体の活性化と再構築につながる可能性を秘めている。したがって、後続の章では具体的な事例と結びつけ、地域芸術活動が生み出す「儀式感」がどのように形成され、その影響が地域住民の日常生活と共同体構築にどのような変化をもたらすかを分析する。

第3章 「儀式感」の変容と地域共同体構築への影響：大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレを事例に

本章では、日本の「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」（以下「大地の芸術祭」と呼ぶ）を事例として、芸術活動が引き起こす「儀式感」の変化とそれが地域共同体の構築に及ぼす段階的影響について探究する。大地の芸術祭は、新潟県の豪雪中山間地帯に端を発する。この地域は、人口流出、高齢化の進行、産業経済の停滞、自然文化資源の未活用など、多重の課題に直面していた。これらの課題に対応するため、地方行政は1994年に「ニューにいがた里創プラン」を提案し、芸術を通じて地域の食、雪、伝統文化などの地域資源の付加価値を高めることを目指した。1996年には、この基盤の上に「越後妻有芸術のネックレス整備構想」が提案され、大地の芸術祭がその中核プロジェクトとしてスタートした。注目すべきは、芸術祭の初期段階において地域住民から強い反対と疑問の声が上がったことである⁵⁰。しかし、芸術祭の継続的な開催により、芸術の価値が徐々に認識されるようになった。現在、芸術祭は760平方キロメートルに及ぶ芸術の里へと発展している。2000年の第1回から2024年の第9回まで、日本の地域芸術活動で最も長期にわたり継続されている。地域住民と地域間の連携は全体的に強まる傾向を示し、参加集落数は28から109へと増加している。

このような変遷は、なぜ大地の芸術祭が現代の社会環境において継続的に存在し、人々の支持を得ることができるのかという疑問を喚起する。筆者は、大地の芸術祭の成功は芸術と地域住民との関係の段階的变化に起因する可能性があるという仮説を提示する。この仮説に基づき、本章では大地の芸術祭の発展過程を詳細に分析し、芸術と地域住民の関係が経験した三つの動的変化段階を観察した。

第1節 第一段階：受動的な芸術制作への参加に基づく一時的な共同体の形成

芸術活動が共同体構築を促進する第一段階において、地域住民は主に、アーティストの

指導のもとで、アーティストの作品の完成を助けることにより、芸術祭の活動に参加していた。この段階における、芸術活動への受動的な参加が引き起こす意識の変容は「『儀式感』の第一段階」と呼ぶことができるのではないかと考えられる。本節では2000年の第一回大地芸術祭において、地域住民が協力して完成させた代表作品「風のサブロウサマに会えるか」を取り上げる。

「風のサブロウサマに会えるか」は、日本のアーティスト岡部昌生が2000年の大地の芸術祭で展示した作品である。岡部は、この地域特有の自然と歴史、農業や棚田の稲作、自然神信仰や民俗など、他の町では得られない豊かな文化を拓本という技法を用いて表現し、大地の芸術祭に集う多くの人々に紹介したのである。拓本を用いた芸術作品の意義について、彼は次のように述べている。

共同作業によって歴史の一部が掘り起こされ、手に触れる過去を現在に移し / 写しながら、擦りだされた断片の記憶から歴史というものを読みなおす視点も、同時にもつのではないだろうか⁵¹。

岡部の作品制作は、地元の人々の協力と、地元の農機具や生活用具を素材として活用することを前提としていた。2000年1月、岡部は松之山に到着し、まず地元のボランティアにフロッタージュ技法の説明を行った。その後、ボランティアの協力を得て、地元の家庭から古い農機具や生活用具を集めた。2000年8月17日から20日までの4日間で、小学生から高校生を含む200人以上の地元住民が作品制作に参加した。参加者は集めた農具や生活用具から好きなものを選び、松之山地区の屋外空地で、拓本技法を用いて鉛筆や墨で物品の形状をA4用紙に摺り取った。各参加者は平均30—40枚の作品を制作し、完成後はファイルに綴じて大地の芸術祭期間中、屋外に展示された。

十日町出身の道畑進は、ボランティアとしてこの活動に参加した。活動終了後、彼は次のように感想を述べた。

私達ボランティア仲間と地域の人達、そして町行政が一体感をもった4日間でもありました。特に子供達が昔の農機具、生活具に触れるとともに古い信仰のかたちを学んだことの意義は大きく、過疎化が進む地域の人達に一種の安堵感を与えました。それを思うとき、この芸術祭が地域にとって価値あるものであったことを強く感じます⁵²。

道畑の感想からわかるように、地域住民は芸術的視点で日常生活と関する農機具や生活用具を観察することにより、日常生活を再認識する新たな契機が提供されたのである。これにより、活動参加者は作品制作を指向する新たな一時的な共同体を形成したと言える。活動の過程で互いに交流し、異なる組織に所属するボランティア、学生、行政職員が共同で協力し、相互に調整し、人々が日常的に使用する生活用具を表現主題とする芸術作品と一緒に完成させた。このように、芸術活動に参加した後、参加者の地域の日常生活に対する気持ちが変わるという現象は、大地の芸術祭が地域で継続的に開催されるにつれて一層顕著となった。

かつて「しんどいから棚田の耕作を止めたい」と言っていた「おじいさん」が、2003年の大地の芸術祭の終了後、新潟県都市局都市政策課の渡辺斉の手を握り、「嬉しかった、頑張ってやっていくことにしたよ」と言った⁵³。このような参加者の変化が渡辺に影響を与え、彼は次のように述べた。

アートが触媒になって背後にある圧倒的な山里の自然、先人の労苦の賜である棚田や集落の力と美が全国からの来訪者に発信されたことを、そして彼らとのふれあいを通じて地域の人々に自らのふるさとの力が反射されたことを強く感じました⁵⁴。

また、松代町福島出身の美濃和英也は、同じく2003年の大地の芸術祭が開催された後、自身の故郷を外部の人々に紹介する際の気持ちが変わったことを次のように述べている。

地域を紹介する時は決まって開口一番「豊かな自然」というのが常套語のようになっておりますが、「豊かな自然」というには何かが欠けており、自然が生かされていないような気がします。ところが第2回大地の芸術祭が、その欠けていた「何か」を的確に捉え、平凡な山や緑の地形を「豊かな自然」へ大きく変えてくれました⁵⁵。

以上を総括すると、第一段階における大地の芸術祭の儀式感と共同体形成について、次のように考察できる。この段階では、地域住民が芸術家の指導のもと拓本活動に参加した。4日間の創作過程で、200名を超える多様な背景を持つ地域住民が共同参加し、芸術創作を軸とした新たな交流・協働の場が形成された。この場は、新たな生活体験や地域間協働の機会をもたらしただけでなく、参加者に地域の自然、歴史、農業、信仰、民俗文化を再考する新たな視点を提供し、地域の一体感を醸成した。これにより、彼らの地域に対する認識は、単なる「豊かな自然」から地域文化と自然資源の魅力に対する深い理解へと変容し、この段階における儀式感が形成された。しかし、この段階で形成された共同体は主に一時的なものであり、その持続性と深度にはさらなる発展の余地があることに留意すべきである。

第2節 第二段階：芸術家との協働に基づく芸術制作により持続的な共同体の形成

大地の芸術祭の第一段階における儀式感は一時的な共同体を形成したが、多くの住民は芸術祭の芸術家や作品に対する深い理解を欠いていた。2004年に突如発生した新潟県中越地震後、大地の芸術祭が展開したサポーターの活動が、地域住民の芸術祭に対する関係性を変えた。地震発生翌日、芸術祭の関係団体は迅速に芸術家、各種専門家、ボランティアを集め、元の芸術祭準備作業を「大地の手伝い」と称する活動へ転換した。この1年間続いた支援は、物質的援助の提供だけでなく、外部の芸術家による被災家屋の修復や、被災地の子供たちのための芸術をテーマとしたワークショップ開催など、芸術を通じて住民に

精神的支援も提供した。これらの芸術家と芸術活動参加者が地元と最初に接触したのは、2000年に始まった大地の芸術祭だった。途切れることなく続いた芸術活動の結果、人々の間の信頼関係が徐々に積み重なり、地域の人々と外部の人々との交流や関係性が深まっていった。「大地の手伝い」活動をきっかけに質的な変化が生じ、「『儀式感』の第二段階」へと移行したのである。

この段階において、地域住民は芸術祭への参加が受動的から能動的へと移行する。筆者の見解では、この段階では地域住民と芸術家との相互理解に基づき、双方が協力して芸術作品を完成させる行為が「協働」であると言える。地域住民が受動的な参加から主体的な協働へと移行するにつれて、双方の意識の変革は「『儀式感』の第二段階」と見なすことができる。筆者は、この段階における人々の意識と双方の関係の変化を中心に、「うぶすなの家」という空家プロジェクトを取り上げ、その影響下で生じる「儀式感」と形成される共同体について分析する。

2006年の芸術祭において、大地の芸術祭の関係団体は新潟県の災後復興の状況を考慮し、空家プロジェクトを推進し、「うぶすなの家」を生み出した。この空家は1924年に建てられた越後中門造りの茅葺き民家であり、2004年の中越大震災で地盤がずれて壊れ、家主は十日町市街へ移住した。2006年の芸術祭期間中、芸術家たちは焼き物を用いてこの空家を再生し、陶芸作品の展示スペースとした。このプロジェクトは空家の再生だけでなく、地域住民と芸術家との間に新たな協働の形を示した。この新たな協働の形は、第一段階で芸術家が地域住民の協力を必要とし、地域住民が芸術家の創作の意味を理解できずに芸術活動に受動的に参加していた状況から、地域住民が主体的に参加し、さらには自発的に芸術家と共に地域の資源の活用を探究する。これは「『儀式感』の第二段階」と呼べるのではないか。

この新たな協働の形の影響下で、芸術家と地域住民は互いに協力して学び合い、それぞれの意識の変容を引き起こすことができた。空家の清掃と解体の過程で、芸術家たちは多くの残された物品を発見し、これらの物品から地域の先人たちのライフスタイルと暮らし

の知恵を理解し、芸術家自身の生活スタイルを再評価するきっかけとなった。うぶすなの家プロジェクトを担当した建築家の安藤邦廣は、プロジェクトに参加した後の彼自身の感想を次のように語った。

今回の空家プロジェクトは、民家の場の力に触発されて芸術家が作品をつくれば、それを受けて建築家と職人が民家をつくり変えるという、協働の取り組みであった。民家の歴史を読み込む中に、その未来を探る試みともいえる。その作業の過程で、じつは民家が協働の場であり、民家の存続が協働を呼び込むことが見えてきた。まずそれは家族の協働であり、地域の協働である。また家畜や蚕との協働であり、田畑の作物や里山の草木との協働である⁵⁶。

安藤が使う「協働」は広い。地域住民が芸術家を支援して空屋の改修を行うことだけでなく、芸術家が地域住民と協働して、地域の魅力を反映した季節の料理の開発も含まれる。うぶすな家の女将たちは、地域の棚田で生産される米や山菜などの地域食材を利用し、芸術家の協力を得て季節の料理を開発し、うぶすな家の来訪者に提供する。住民と芸術家の協働により、2006年の芸術祭期間中にうぶすな家は22,000人を超える来訪者が訪れ、レストランの売上高は1,200万円に達した⁵⁷。芸術祭の会期が終了した後も、うぶすな家は人気が続いている。女将の水落静子は、うぶすな家で料理を作るようになってからの心境の変化について次のように語っている。

自分たちの地域がとっても良いところだっていう自信はもともとお母ちゃんたちの中にはあったんだけど、やっぱりテレビとかではなく、生でお客さんと話してみて、ちゃんと外の人が地域を認めてくれたことで、自信が確信へと変わりました⁵⁸。

「うぶすなの家」の作品において、地域住民と芸術家が共同で作業を行う中で、外部の

家屋の修復から地域の食材を用いた料理まで、互いの意識が変化していることが明らかとなる。形式は何であれ、目的はこの地域のライフスタイルをより多くの人々に理解してもらうことである。「うぶすなの家」によってもたらされた変化について、北川は以下のような評価を述べている。

明治以降の美術界が切り捨ててきた生活の美がよみがえったこの空間には、そこで働く人をも生き活きと魅了する力が備わっていた⁵⁹。

北川が指摘する地域住民が再発見した生活の美こそが、筆者が議論したいことであり地域住民が日常生活で感じる「儀式感」と同じものを指すと言える。この「儀式感」からの刺激が、地域住民を空家レストランの創造に参加させ、芸術家と協力して料理を作り、料理を通じて地域の特色を表現する動きを促進し、外部からの肯定的なフィードバックを得ることにつながった。これにより、地域住民は受動的な参加から自主的な芸術活動に移行し、その後の芸術祭では芸術家と共に食文化に関連するさらに多くの芸術活動を展開することとなったのである。

代表的な例として「上郷クローブ座レストラン」である。地域の女性たちと芸術家 EAT & ART TARO が共同で創造した芸術作品である。この作品は、2015年に廃校となった中学校をリニューアルし劇場と宿泊施設を備えたパフォーミング・アーツの拠点内のレストランである。地域の女性たちは芸術家と共に『北越雪譜』の世界をモチーフにした脚本を作成した。この脚本には豪雪地帯の生活が描かれている。これを演じながら津南産の旬の野菜や津南ポークを使った料理をサーブするという演出で来訪者に提供した。これにより、来訪者は料理を味わうだけでなく、地域住民の演劇を見ることで地域の魅力をより深く理解することができたのである。「上郷クローブ座レストラン」の芸術活動に参加した来訪者の木村覚は、次のように感想を述べている。

ただおいしいだけではなく、この土地を胃袋を通して鑑賞しているかのような気持ちにさせられる…（中略）この土地の未来を想像しつつ、日本の未来への想像力をたくましくさせる、それこそが6回目の大地の芸術祭が観客に与える最大の土産なのだ⁶⁰。

以上の活動事例と実地調査により、大地芸術祭の第二段階において、地域住民と芸術の関係は受動的参加から能動的協働へと移行し、より深層的な相互作用と参加を体現している。「うぶすなの家」空家プロジェクトは、この変化を明確に示す例である。このプロジェクトでは、住民と芸術家の協働が、単なる作品配置にとどまらず、生活経験や地域文化を創作過程に融合させるまでに発展した。例えば、地域の女性たちは棚田で生産された米や山菜などの地域食材を活用し、芸術家の助言を得て季節料理を開発し、来訪者に提供した。

この協働関係の深化は、芸術家と住民間に双方向的な影響をもたらした。住民の生活経験が芸術家の創作に影響を与え始める一方で、芸術活動が住民の地域資源探索と活用への新たな欲求を喚起した。この段階で形成された「儀式感」は、住民の地域資源に対する探索と活動への欲求として表れている。住民の参加度と主体性は顕著に向上したものの、住民主導の内発的発展には至っていない。そのため、この段階の共同体は依然として一定程度、芸術家の参加と指導に依存している。それは住民と芸術家双方の協働と相互関連のもとで形成され、一定の持続性を有するが、完全に自律的な状態には達していない。

第3節 第三段階：住民が能動的に行う芸術活動に基づく内発的な共同体の形成

大地の芸術祭の継続的な開催に伴い、住民たちは当初、芸術家の創作に受動的に参加する段階から、芸術家と協力して芸術作品を完成させる段階に至る。最終的には地域の資源と芸術形態を活用し、日常生活と密接に連携した自発的な芸術活動を形成する段階へと変化していく。このような意識の転換は『儀式感』の第三段階」と見なすことができるのではないかと考える。この段階に至ると、人々は芸術活動の終了と共に元の生活に戻るこ

とはなく、活動が終了した後も、活動に参加する中で得られた意識の転換が人々の日常生活に影響を与え続けるからである。この段階の「儀式感」の状態、そしてその影響下で形成される共同体を分析するために、松代エリアの小荒戸村を取り上げ、住民が大地の芸術祭の活動に参加した後の変化を中心に考察する。

小荒戸村は松代エリアの中部に位置し、2022年に大地の芸術祭に対して行った現地調査によると、芸術祭関連の作品や施設に近いことから小荒戸村の住民は芸術祭の開催期間中、芸術祭の関連情報や芸術祭関連の人々を受け入れている。そのため、小荒戸村の住民は芸術作品の制作を共同で行うことに積極的である。このことを示す作品を三つの例を挙げたい。

まず、関根哲男によって制作された《帰ってきた赤ふん少年》という作品を考察する。この作品は、地域の住民が少年時代に赤いパンツを着て渋海川で遊んだ思い出をモチーフにしており、地域の住民の協力を得て完成した木彫作品である。現在も、この作品は小荒戸村の渋海川沿岸に展示されており、完成後も地域の人々に影響を与えている。冬季には住民が集まり、作品に衣服を着せることが恒例となっている。地域の住民のひとり、

「この作品が昔からある作品なんです、今日（2022年、筆者の調査記録時点）に至るまで13年間経過した後も、毎年大切に保管され、人々によってさまざまな装飾が施されている⁶¹。」と述べている。現在、地域の掲示板には「川沿いの赤ふん少年達（に）冬の衣服をいただけたら有難いです」と書かれている。これは、住民がこの作品を現代版の「かさこ地蔵⁶²」として見なしていることを示している。このように住民自身が作品に手を加える二次創作の過程を通じて、住民が芸術作品をどのように捉えるかという視点に変化しているのである。つまり、作品に衣服を着せる行為が、住民に情感を湧かせ、作品への愛着や二次創作の意欲を促しているのである。最初は芸術家の視点から、住民の生活を反映するための作品であったが、それが住民自身の視点に変わり、作品を地域の住民間の新たな絆として見るようになったのである。この視点の変化により、現在の作品は芸術家と地域の住民との関係だけでなく、住民と地域間の新たな関係を生み出していると言える。

次に、ペルラ・クラウセが制作した《石と花》について考察する。2009年の芸術祭の終了後に、ペルラは地域住民との協働制作の記念として、故郷メキシコ特有の石を小荒戸村に残した。しかしながら、村の住民はこの石を単に保管するだけでなく、作品として石を残すべく様々なアイデアを討議した。最終的に、コンクリートにその石を埋め込むこととなった。さらに、作者の名前を小石で作成したサインも追加した。村の住民たちは、この新たな展示方法を通じて、小荒戸村と芸術家との物語を記念するという意図があった。住民が提案した新たな展示方法は、人々に異なる感動を与えた。同じく現地で制作活動を行っていたキジマ真紀は「暗闇の中に天井から吊り下げられて、幻想的な雰囲気だった空家での展示に比べて、こちらからは、外の光を浴びたみずみずしい印象と根を張ったような力強さを感じます⁶³」と語った。村の住民は、これまでの芸術家が主導する芸術制作の枠組みを越えて、自発的な芸術制作の動力を生み出したと言える。その結果、住民は既存の芸術作品に新たな表現形式を加え、芸術が地域の地域に深く根ざす新たな試みを展開したのである。

最後に取り上げる作品はキジマによる《ファンシーガーデン》である。村の住民は、アーティストが主催したワークショップに参加することで、野菜ネット、ストロー、モールなどの日常生活用品を活用して植物を制作し、自分の感情を表現する方法を学んだ。キジマが指導した《ファンシーガーデン》が完成してから2年後の2011年に生まれた「小荒戸雪アート」は、村の住民が自分たちの学んだ制作方法を活用して自分たちの感情を自発的に表現することを示している。2011年3月11日、東日本大震災が発生し、その後近くの新潟県十日町市でも地震が発生し、小荒戸村も影響を受けた。震災で亡くなられた人の冥福を祈り、今でも厳しい避難生活を送られている人に寄り添うため、小荒戸村の住民は雪のローソクアート活動を自発的に開催した。そして、毎年3月11日にはこの活動を行うことを決定したのである。この活動は小荒戸村全体で行われ、各家庭の道路沿いに積もった雪を利用して小さな展示スペースを作り、そこに祈りの感情を象徴する芸術作品とろうそくを置く。「松代おやっこ村」のブログには、住民が雪の中に置いた祈りの芸術作品の中に、

キジマから学んだ野菜ネットなどで植物を作る方法を活用した祈りのための花束がある⁶⁴。これにより、住民が過去の芸術家との協働作業中に学んだ技術を自分たちの理解に基づき、自分たちの感情や願いを伝える新たな表現として日常生活に取り入れていることが確認できる。

小荒戸村の資料を調べていく中で、筆者はこの村で行われた活動の記録がまだ少ないことに気づいた。より詳細な現地の状況を理解するために、筆者は2022年10月30日に「大地の芸術祭公募展ツアー」に参加して小荒戸村で現地調査を行った。筆者は、地域住民の案内の下で、地域の住民が以前の芸術家の指導の下で参加した芸術作品だけでなく、その後の地域の住民が芸術家から学んだ技法を活用して作った強烈な地域の特色を持つ新たな芸術作品も前述した通り見ることができた。これらの自発的に制作された芸術作品を通じて、筆者は小荒戸村が大地の芸術祭に参加した後に生じた芸術創作に対する積極的な態度を強く感じた。

さらに重要なことは、地域住民の芸術に対する態度は芸術活動の期間だけでなく、芸術活動が終了した後の日常生活にも続いていることである。2015年以降は外部の芸術家が村に入って芸術活動を行うことが少なくなったにもかかわらず、地域の住民は依然として芸術に対して積極的な態度を保ち続けている。住民たちは「小さな集落でも楽しい事を実施し、明るい集落を楽しみたいと思う、笑顔を忘れないようにしよう⁶⁵」と主張し、2022年4月から10月まで地域住民である富沢とみ子と笠原等が「作家」となり、「小荒戸村芸術展」を開催した。これは「道端アート」作品（11点）と「草藪アート」作品（20点）に分けられ、村の道路に沿って展示されている。「道端アート」とは住民が日頃目にする石や木に人物や動物の図案を描き、生活の場に設置し、道行く人々に小さな楽しみを提供するものである。「草藪アート」とは住民の生活の写真をプラスチックのドームに収めて時間の停止した小さな展示空間を創出し、「小荒戸の地で生まれた人々が成長していく姿がドーム内で展開され、人間ドラマが展開されている⁶⁶」という地域の人々の望みを通じて表現され、草むらに設置される。2022年のフィールドワークで感じたのは、最初に芸術活動

を始めた住民の芸術への愛着、さらには自発的な芸術活動による新たな意識が、村の日常生活の中に深く溶け込んでいるということである。こうした新たな意識は、地域住民の日常生活への認識の変化だけでなく、地域の人にとっての新しいライフスタイルの再思考や選択の可能性を提供しているのである。

以上の活動事例と実地調査により、大地芸術祭の第三段階において、住民と芸術家の関係性に質的変化が生じた。一方向の受容から双方向の相互作用へと変容し、最終的に住民自身の創造力として内在化された。この内在化過程は技術の習得にとどまらず、新たなライフスタイルや価値観の形成をも意味する。小荒戸村の事例は、この変容を明確に示している。住民主導で組織された「小荒戸村芸術展」は、この内在化の具体的表現である。

「道端アート」や「草むら芸術」の創作は外部芸術家に依存せず、住民自身が芸術家役割を担っている。この創作活動は外部観光客の誘致を目的とするのではなく、日常生活に影響を与え、地域の結束力を強化する新たな要素となっている。これらの芸術創作が地域文化や生活の記憶と密接に結びついている点は注目に値する。例えば、「草藪アート」における生活写真をプラスチックのドームに収める手法は、住民の創造性を示すと同時に、地域の記憶を記録し伝承する独特の方法となっている。この手法は、住民が自身の文化や歴史を再認識し、珍重する姿勢を反映している。さらに、小荒戸村住民が毎年3月11日に開催する「小荒戸雪アート」は、芸術が感情表現や地域の結束力を高める媒体となり得ることを示している。この活動は震災犠牲者の追悼にとどまらず、地域が共に困難に立ち向かい、相互支援を象徴するものとなっている。

この第三段階の儀式感の影響下で形成された共同体は、強い内発性と持続可能性を有している。これは外部勢力によって強制されたものではなく、住民自身のニーズと創造力から生まれた産物である。この種の共同体は地域の実情により適応し、住民の真の生活ニーズや価値観を反映することができる。芸術活動を通じ、住民は自らの共同体の価値を再発見し、地域への帰属意識や一体感を強化し、より緊密で活力ある地域ネットワークを形成したのである。

まとめ

本章では、大地の芸術祭の2000年から現在に至る発展過程と、その24年間における地域住民の日常生活への影響を詳細に分析した。これにより、芸術活動が地域の新たな共同体を構築する触媒としての漸進的プロセスが明らかになった。この変容は、儀式感を生み出す構造の変化と共同体の構築過程に具体的に表れており、以下の三段階に概括できる。

第一段階：受動的な芸術制作への参加に基づく一時的な共同体の形成。この段階では、地域住民が芸術家の指導下で芸術創作に参加した。例えば、「風のサブロウサマに会えるか」という活動への協力が挙げられる。住民は地域の自然、歴史、文化を新たな視点で捉え、地域の一体感と初歩的な儀式感を生み出す構造が形成された。ただし、この段階の共同体は主に一時的なものであり、持続性に課題があった。

第二段階：芸術家との協働に基づく芸術制作による持続的な共同体の形成。この段階では、住民の参加が受動的なものから能動的な協力へと発展した。空き家の改造や地域の特色ある料理の開発などの活動を通じて、住民は日常生活の魅力を再発見し、より深い儀式感を生み出す構造が確立された。この協働は持続的な共同体の形成を促進し、住民の地域文化と資源に対する再認識と活用を喚起した。

第三段階：住民が能動的に行う芸術活動に基づく内発的な共同体の形成。この段階で、住民は芸術活動の主導者となった。例えば、小荒戸村の住民が自主的に開催した芸術展がこれにあたる。住民は芸術創作を感情表現と地域のつながりを維持する手段として内在化し、自発的に儀式感を生み出す構造を構築した。この変化は住民の日常生活リズムを変えただけでなく、地域に対する価値観を再構築し、新たな地域ライフスタイルを形成した。

大地の芸術祭の三段階分析を通じて、芸術活動が各段階で儀式感を生み出す構造を変化させ、徐々に地域の新たな共同体構築を促進することが明らかになった。このプロセスで、芸術活動は外部からの刺激から内発的な原動力へと変化し、儀式感を生み出す構造も外部依存型から自律型へと進化した。この変容は地域に持続的な活力と発展の推進力をもたら

し、同様の課題に直面する他の地域にも有益な示唆を与えている。次章では、大地の芸術祭で観察されたこの芸術の共同体への影響が他の地域芸術活動にも適用可能かを探究し、芸術が地域共同体の構築を促進する触媒としての普遍性と潜在力をさらに検証する。

第4章 「儀式感」の変容と地域共同体構築への影響：他事例における仮説検証

前章では、日本で最も長期にわたり実施されている大地の芸術祭を分析し、芸術が触媒として機能し、住民に「儀式感」を生み出す三つの段階を通じて、地域の新たな共同体構築に影響を与える傾向を明らかにした。しかし、大地の芸術祭は公益財団法人福武財団からの多額の継続的な資金援助を受け、広範囲で展開されているという特殊性がある。

本章では、この傾向の普遍性をさらに検証するため、日本の他の地域で行われている規模や目的の異なる芸術活動に焦点を当てる。代表的な二つの事例として「BEPPU PROJECT」と「かめおか霧の芸術祭」を取り上げよう。

別府の「BEPPU PROJECT」は大地の芸術祭と同様に定期的開催される芸術祭だが、その特徴は異なる。大地の芸術祭が著名な芸術家の招聘に注力するのに対し、BEPPU PROJECTは地域住民の興味を喚起することに重点を置き、芸術の質のみを評価基準としない。このプロジェクトは、芸術活動を通じて地域住民の参加を促し、温泉以外の地域資源を開発することで、特に20—30代の若い女性など新たな観光客層の誘致を目指している。この取り組みは、地域の生活環境を変え、住民を主体とし、芸術文化とデザインを核として地域の課題解決を図ることを目的としている。

一方、亀岡の「かめおか霧の芸術祭」は異なるタイプの芸術活動を代表している。これは地域住民を対象とした通年の芸術活動で、地元のアーティストリソースを活用して小規模な芸術活動を展開している。その目的は、地域住民間の新たなつながりを促進し、自身の生活体験の魅力を再発見することにある。この方法は、住民が日常生活の中で芸術を発見し追求することを奨励し、日常生活そのものが真の芸術であると再考することを促している。さらに、この変化は地域行政、学校、住民、芸術家など、様々な主体間の融合を促進し、地域資源の循環を構築することを目指している。

本章では、これら二つの異なるタイプの芸術活動を分析することで、大地の芸術祭で見出された新たな共同体への影響傾向が他の地域芸術活動にも存在するかを検証し、芸術が

地域の新たな共同体構築の触媒として機能する普遍性と可能性をさらに探究する。この分析を通じて、第三章で提示した仮説の妥当性を検証するとともに、異なる文脈における芸術活動の役割と影響をより深く理解することを目指す。

第1節 BEPPU PROJECT

大分県別府市は日本の著名な温泉地であり、「山は富士、海は瀬戸内海、湯は別府」というキャッチフレーズを持つ。1950年に国際観光温泉文化都市に制定され、その後観光モデル都市（1951年）への指定、観光協会発足（1952年）が続いた。20世紀60年代から80年代にかけて、別府は新婚旅行、修学旅行、社員旅行などの団体旅行で隆盛を極め、観光関連産業を主とする地域経済構造が形成された。しかし、社会経済の発展に伴い、人々の旅行選択肢が多様化した。海外旅行やテーマパークなどの新たな選択肢の出現により、温泉を唯一の売りとする観光地別府の魅力が徐々に低下した。別府市の「温泉観光の過去と現在」報告によると、別府市の観光客数は1976年に1312万人のピークを迎えた後、減少傾向に転じた。観光業に高度に依存した地域経済構造のため、観光客数の継続的な減少と停滞は市民所得の低下、市民税の減少をもたらし、法人税と固定資産税も減少し、最終的に市税収入の全体的な減少を引き起こした⁶⁷。同時に、別府市の人口も1981年に134,485人のピークを迎えた後、継続的に減少し、2024年時点で112,008人にまで減少した⁶⁸。地域人口の減少はさらに地域経済の圧力を加速させ、市中心部の商業地区では空き店舗や空家が多数出現し、別府市は地域発展の衰退という厳しい課題に直面した。

この背景のもと、日々疲弊していく大規模温泉地である別府市を再び活性化し観光客を呼び戻すために、様々な地域おこし事業が試みられた。その中で、芸術家の山出淳也が2005年に設立したBEPPU PROJECT（2006年にNPO法人化、以下BPと略す）は、アートを活用して、別府の新たな地域の魅力を再発見し、新たな客層（若年層・女性・個人客）を引き付け、地域の新たなイメージを創造することを目指した。2024年に設立19周年を迎えたBPの活動範囲は、国際芸術フェスティバルの企画開催、地元行政との協働による文化

政策の立案から実現、出版事業、市街地の空き店舗のリノベーションなど多岐にわたる。

さらに BP は地域教育の普及や人材育成、芸術家やクリエイターの当地への定住促進にも尽力し、このNPO組織は当地の芸術創造人材の重要な育成基地となった。したがって、

BP の発展過程を分析することで、儀式感形成の三段階とそれが共同体構築に与える影響をさらに検証できると考えられる。

BP における儀式感の第一段階は、主に芸術を通じて住民の興味を喚起することである。

BP の発起人であり代表理事の山出は、芸術を「ある種のムーブメントとして巻き込んでいくあり方⁶⁹」として捉えている。彼は BP における芸術の意義について以下のように述べている。

アートとは、自らが感じはじめることであって、見方や答えを教えられ理解するものではない。大切なのは、その出会い方だ。「アートは難しい」と敬遠するのではなく、「よくわからないけれど面白そう」と興味を持ってくれる人を増やし巻き込んでいくための仕掛けとして、さまざまな手法を試行していった⁷⁰。

住民の関心と興味を広く喚起するため、BP チームは2005年に別府旧市街地の半年間の調査を行い、「まちの記憶に会いに行く」という芸術活動を展開した。彼らは整理した街道の歴史と住民の回想を文字とイラストの形で52枚の琺瑯看板に表現し、別府旧市街地である南部・中心部地区の大小様々な通りに設置した。この芸術展示方法により、古い街道が地域の物語に満ちた場所に変貌し、人々がこれらの看板を探索し発見することを促した。その後、2007年に山出はさらに「星座型・面的アート・コンプレックス構想」を提案した。この構想は「中心市街地の文化スペースの整備やまちなか居住、起業促進、人材育成と情報発信に取り組む拠点⁷¹」を目指し、地域の魅力を再構築することを目指している。2008年8月、この構想の一環として「platform」芸術活動が設立・運営を開始した。この活動では、別府市中心部の8箇所の空き家や店舗をリノベーションし、既存の空間の使用法

を再定義し、人々の新たな交流の場として整備した。これらの基盤整備が完了した後、

BP は定期的に芸術家を招き、地域環境と融合した芸術創作を行うようになった。2009 年から 2015 年まで 3 年ごとに「別府現代芸術フェスティバル混浴温泉世界」芸術祭を開催し（2016 年からは毎年 1 組の芸術家による展覧会「in beppu」に変更）、これらの芸術活動を通じて地域住民、芸術家、外部観光客の交流を促進した。2015 年に開催された「混浴温泉世界」を例に挙げると、この活動は夕方開催されるツアー形式を採用した。活動期間中は 1 日 2 本限定の「アートゲートクルーズ」が行われ、少人数のツアーで参加者を別府の戦災を免れた路地に案内し、普段立ち入ることのできない場所でパフォーマンスや芸術作品を鑑賞する機会を提供した。

これらの芸術活動は、観光客の体験ばかりでなく、住民の日常生活環境を変化させ、日常の中で歩くうちに芸術に触れる機会を創出し、住民が別府旧市街地の新たな用途を再探索することを促した。当初、住民は受動的に巻き込まれていたが、この潜在的な接触が徐々に住民の興味を引き、自らの生活環境を新たな視点で再認識し、考察するようになった。この自身が暮らす地域に対する好奇心と関心の芽生えこそが、BP がもたらした第一段階の儀式感の表れであり、住民のより深い芸術活動への参加の基盤を築いたのである。

芸術活動と住民生活の密接な関係が深まるにつれ、地域の芸術活動は住民の注目を集め、住民を主体とし、芸術家が協力する新たな協働形態が生まれ始めた。これは BP における儀式感形成の第二段階と考えられる。その中で最も代表的なのは、2010 年から始まった「ベップ・アート・マンス」活動である。この活動は混浴温泉世界実行委員会が主催となり、別府市内で開催される様々な文化事業を紹介し支援する、登録型のプラットフォーム事業である。この活動は毎年秋に定期的に行われ、主に「市民を主体とする小規模文化団体の育成・支援を目的とし、質や規模を問わず何でも登録可能」としている。活動内容は住民それぞれの生活経験や個人の興味と密接に関連しており、例えば地域野菜による食文化体験、主婦によるフラダンスの発表会、公民館で開催されたコンサート、自宅で開催する写真展などがある。2010 年の 27 の実施団体、43 の企画から、2023 年には 97 の実施団体、

120 の企画へと発展し、住民の参加熱意は継続的に増加している。さらに、コロナ期間中も住民の参加期待に応えるため、2020年にはオンライン参加モードを導入し、43,648名のオンライン参加者を引き付けた。注目すべきは、この活動が住民を主体としているにもかかわらず、開催過程においてBPが協力者の立場から住民の活動展開を支援している点である。例えば、活動のパンフレットやWeb広報、連絡窓口&販売窓口など、活動の展開フレームワークは別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」実行委員会が構築・運営を担当している。さらに、2013年からは住民がより良く活動に参加できるよう、BPは「ベップ・アート・マンスをつくろう会」を企画し、プログラム企画者を中心に、地域の方などを交え、事業についての意見交換、企画者同士の交流を図っている。「ベップ・アート・マンス」の来場者アンケートで特徴的なのは、「来年度以降プログラムを企画・開催する側として参加したい」という割合が一定数存在する点である。また、来場者の別府市内・大分県内居住者の割合は13年間を通じて70%—90%で推移している⁷²。このことから、地域の各主体間の協働により住民自身の活動を完成させる過程で、参加活動住民が抱く活動展開への熱意こそが第二段階の儀式感の表れであると考えられる。同時に、これは彼らの日常生活における新たな繋がり of 構築をも意味している。

BPの継続的な活動により、芸術は別府地域に徐々に浸透していった。2009年から2017年にかけて、120名以上の芸術家が別府に移住し、当地の人口の約0.1%を占めるようになった⁷³。同時に、住民も自身の日常生活に変化が生じたことを実感している。「別府ってアートの町というのがやっと浸透してきたような気がする。大きなアートイベントはあったけど、身近に広がった気がするので、続けてほしい⁷⁴」という声が聞かれるようになった。芸術は別府全体に新たな地域生活の雰囲気をもたらしたのである。この変化は、BPにおける儀式感形成の第三段階と考えられる。その中でも最も代表的なものは、2022年に策定された「令和4年度 芸術文化実施計画文化観光の推進とアーティスト・クリエイター移住・定住計画」に基づいて展開された一連の活動である。筆者は、これらの活動が「人、物、空間」という三つの側面から、芸術が当地の日常生活に及ぼす促進的变化を体

現していると考える。

「人」の側面において、BP は芸術家のニーズに応じて、住居や仕事の支援を提供している。例えば、2023 年 1 月に開設された別府市創造交流発信拠点「TRANSIT」がある。ここでは、芸術家たちへの移住支援や活動紹介と同時に、地域課題や企業の問題を解決するための創造的人材マッチングも行っている。また、『Art Fair Beppu』の開催を通じて、ギャラリーに所属していない新人芸術家たちに自主出店の展示機会を提供している。

「物」の側面では、地域の空き家資源を活用し、建物に新たな価値を創造している。2024 年に完成した『Beppu Studio 01』活動が代表的である。これは、地域の空き家や空き店舗を改装してレンタル可能なアートスタジオに変え、地域住民や芸術家たちに作品制作や発表、トークやワークショップなど、文化芸術に関するさまざまな活動の場を提供するものである。

「空間」の側面では、2022 年から年に 2 組のアート創造を行う『ALTERNATIVE-STATE』活動を展開している。これは従来の BP が開催してきた芸術祭活動とは異なり、芸術作品が長期的に別府市内に保存されることに重点を置いている。芸術を都市の日常景観の構成要素とし、短期的な大規模イベントに限定せず、住民の生活の常態とすることで、別府アートのまちの新たな雰囲気醸成している。

以上の事例から、BP の発展経緯を通じて、BP が地域の発展を促進だけでなく、新たな生活様式と文化的雰囲気を形成したことが明らかになる。BP 総合プロデューサーの山出は次のように述べている。

『ベップ』という名称は、土地としての固有名詞から、より複合的な市民活動を意味する名称となるだろう⁷⁵。

この芸術がもたらした変化により、別府はより包括的で創造的な新たな共同体を形成するに至ったのである。

第2節 かめおか霧の芸術祭

本節においては、かめおか霧の芸術祭を事例として、第三章で提示した儀式感と共同体構築の三段階理論をさらに検証する。亀岡市は京都府の中西部、山々に囲まれた亀岡盆地に位置する。盆地の中央を保津川（桂川）が流れ、霧の発生が頻繁な地域である。このような環境では、「洗濯物が乾かず、髪型も崩れる」、「朝から憂鬱になる」、「視界不良で車や自転車が運転しづらく、迷惑だ」などと人々が思い、「山を越えると別世界」と京都市の住民から揶揄されることもあるそうだ⁷⁶。自然環境の課題に加え、亀岡市は経済面でも苦戦している。京都市まで20kmと距離が近いため、住民や企業の経済活動のすべてが京都市に集中する傾向にある。2018年の地域経済循環率はわずか65.4%で、「地産地消」が実現できていない状況だ。消費の地域外流出（2018年は50億円の損失）は、投資額（256億円）の44%に相当する⁷⁷。しかし、亀岡市に資源がないわけではない。むしろ、豊富な地域資源の存在を住民が十分に認識していない可能性が高い。このような背景のもと、亀岡市は2018年に「かめおか霧の芸術祭」（以下、「霧芸」）を立ち上げた。総合プロデューサーの松井利夫は、霧芸を「亀岡のまちの人たちの営みが芸術として見えるまちになる⁷⁸」と位置づけている。霧芸の展開過程を分析することで、儀式感形成の三段階とその共同体構築への影響をより詳細に検証できる。

霧芸が生み出す儀式感の第一段階の形成は、主に芸術家主導のワークショップ、講演会、展覧会を通じて、住民が自らの地域を再認識するよう導くことである。例えば、「KIRI WISDOM」と「KIRI EXHIBITION」活動では、芸術家が亀岡での生活経験や地域の魅力について独自の見解を講演形式で共有している。「KIRI² 大学」では、ワークショップ形式で芸術創作技術を教え、住民の芸術体験と交流の場を提供している。「城跡芸術祭」では、芸術家の作品を大本本部、大本花明山植物園、亀岡市役所など、住民の日常生活に密着した場所に展示し、生活環境に変化を与えることで、住民が馴染みの空間を新たな視点で探索するよう促している。これらの活動を通じて、住民は一時的な共同体を形成

し、芸術家の視点を借りて地域の魅力を再発見している。

芸術家主導の活動が深化し、行政の積極的な支援も加わり、霧芸と住民の結びつきは強まっている。儀式感形成の第二段階では、芸術家と住民が協働で長期的な芸術活動を展開し、その過程で双方が地域資源と生活経験の活用に対する意欲を高めている。その代表例が「こどもみんげい」である。この活動は霧芸総合プロデューサーの松井利夫と総合プロジェクトディレクターの辰巳雄基の企画により、亀岡地域の芸術家、農家、企業家、住民が集まり、地域の自然資源を活用した長期的な芸術創作を行っている。活動は2022年から開始され、毎年一つのテーマを中心に三回のワークショップシリーズを展開している。例えば、2022年のテーマは亀岡地域で栽培される野菜を活用して日常使用の器を制作することだった。活動には野菜の収穫、石膏モデル制作の「野菜の型どり大会」、住民協働の粘土制作と地域の陶芸家による焼成の「器づくり大会」が含まれる。活動後、住民と芸術家たちは自作の器を使用して地域の野菜で作ったカレーを味わう会を自発的に開催した。この一連の活動は職業や年齢の垣根を超え、協働を通じて住民と芸術家が地域資源の利用に対する新たな認識と感情的つながりを生み出している。これこそが第二段階の儀式感の具体的な表れといえる。共同創作と試食活動を通じて、共通の生活経験を持つ持続的な新たな共同体が形成された。この深化した地域アイデンティティと結びつきは、2023年と2024年の活動でさらに継続され、発展している。

霧芸活動の継続的な展開に伴い、住民の自主性が徐々に高まり、自発的に芸術活動を企画し始めたことは、儀式感形成の第三段階を示している。「KIRI FARM」という芸術活動は、この段階の代表的な事例として挙げられる。この活動は2022年の「城跡芸術展」終了後、市民サポーターとして参加した地域住民たちが、展示期間中に築いた住民と芸術家たちの関係を継続したいという願いから生まれた。霧芸活動に参加していた亀岡への移住者、奥岡なぎが地域の農耕文化と結びつけて自発的に企画した農業体験活動である。2023年1月に開始されたこの活動は、毎週定期的に行われている（2023年は水曜日と日曜日、2024年は水曜日）。参加者は自身のスケジュールに合わせて自由に共同作業に参加で

きる。「KIRI FARM」は単なる農作業にとどまらず、芸術、農業、コミュニティ構築を融合した総合的なプラットフォームとなっている。活動内容には農作業、専門家による講演、住民が自発的に組織する料理ワークショップ、参加者が共同で栽培した作物の商品化の試みなどが含まれる。この住民主導で地域の日常生活経験と結びついた芸術活動は、新たなネットワークを育み、地域意識を強化し、地域の生活の知恵を伝承する効果を持っている。1年間の発展を経て、「KIRI FARM」は徐々に緊密な新型共同体を形成するに至った。奥岡は「KIRI FARM」に参加した住民たちの変化を次のように語っている。

水曜日メンバーはほとんど毎週来てくれていて、みんなの日常になっているなと感じますね。参加者同士でワークショップを企画して独自に開催していたりとか、新しいことも生まれていて、信頼関係が築けているなと感じてます⁷⁹。

また、「KIRI FARM」が住民と霧芸の他の芸術活動との相互作用を促進している点について、「城跡芸術展→KIRI FARM から KIRI FARM →城跡芸術展という逆パターンが生まれた⁸⁰」という循環が生まれていることも指摘している。この住民が自発的に形成した循環は、霧芸が生み出す第三段階の儀式感が共同体構築に対して内発的かつ持続的な影響を与えていることを示している。

霧芸の活動における儀式感と共同体形成の三段階の変遷を分析することにより、芸術が亀岡の住民の意識を変えただけでなく、地域の特色と文化的価値を再構築したことが明らかとなった。松井は霧芸が亀岡地域に与えた影響について以下のように述べている。

複合的な芸術活動が2018年より継続し、人々や表現の地域内循環を生み出している。

かつて厄介者とされていた霧は、今や自然と人の循環の象徴として亀岡の魅力へと再評価されてきている。

亀岡行政も霧芸が地域にもたらした変化を肯定的に評価している。亀岡市役所文化国際課課長の小塩睦子は次のように述べている

芸術祭のイベントによって行政と民間の連携はより濃密になり、関連部署の数も増えていく。このような他部署とのコラボレーションは、乗数効果を達成できる。かめおか霧の芸術祭をいかに生かし、これまで以上の成果を出していくか、これは市民とともに考えてきたい。芸術祭とのコラボをさらに増やしていきたいと思っている⁸¹。

亀岡は芸術が地域の各分野の主体間の協力を促進する役割をますます重視している。

「ボンボンマルシェ」、「開かれたアトリエ公募展」、「みどりのテーブル」などの芸術活動を住民の日常生活と結びつけて次々と展開し、この新たに形成された内発的な共同体を強化している。これらの活動は共同体の持続的な発展を推進し、亀岡の地域生活の様相を変革することを目的としている。これは芸術が生み出す儀式感の実際の応用における価値をさらに裏付けるものと言えよう。

まとめ

本章では、大地の芸術祭と規模・目的の異なる「BEPPU PROJECT」および「かめおか霧の芸術祭」を分析し、第三章で提案した芸術が儀式感を通じて共同体構築に影響を与える変容の傾向を検証した。この分析により、芸術が地域の新たな共同体構築の触媒として、規模や目的の違いを超えて普遍的に機能することが確認された。同時に、儀式感を生み出す三段階において、地域ごとに採用される芸術活動の方法に一定の差異が存在することも明らかになった。

第一段階：受動的な芸術制作への参加に基づく一時的な共同体の形成。差異は主に芸術家の選択と活動規模に表れる。大地の芸術祭が開催される新潟地域は地理的に遠隔地であるため、国際的に著名な芸術家を招聘し、広範な地域に多数の作品を分散させることで、

視覚的に住民の地域に対する新たな認識を喚起している。対照的に、都市近郊の亀岡（霧芸）は地域間の各主体の連携促進に重点を置き、地元や関連する芸術家を中心に小規模な芸術体験活動を展開している。一方、別府（BP）は旧市街の建物を活用して新たな拠点を創出し、芸術家のパフォーマンスを通じて住民を旧市街に呼び戻すことで、全く新しい生活の雰囲気醸成している。

第二段階：芸術家との協働に基づく芸術制作により持続的な共同体の形成。差異は主に住民の参加意欲を維持する方法に表れる。大地の芸術祭は安定した財団の支援を受け、定期的に大規模な活動を展開し、地域に恒常的な文化イベントを提供している。一方、別府と亀岡は資金的制約から、住民の長期的参加を促す小規模な芸術活動に注力している。これらの活動は、住民の日常生活に密着したテーマを選び、単なる鑑賞を超えた芸術体験を重視する。そうすることで、住民の生活リズムに変化をもたらし、地域の資源と生活経験の魅力を引き出している。

第三段階：住民が能動的に行う芸術活動に基づく内発的な共同体の形成。地域ごとに芸術活動の形態は異なるが、長期的な継続により、これらの活動は徐々に住民の日常生活に溶け込んでいく。その結果、住民が自発的に芸術活動に参加し、内発的な共同体を形成する段階に至る。

これらの差異は、芸術活動が儀式感を通じて共同体を構築する基本的な傾向が類似していることを示しつつ、具体的な実施においては地域の実情に応じた対応が必要であることを明らかにしている。適切な芸術活動のモデルを選択する際には、地理的位置、人口密度、経済的支援、地域の文化資源、住民の参加度などの要因を考慮すべきである。これらの要因を総合的に分析することで、より地域の特性に適した芸術活動戦略の策定が可能となる。

ここで注意すべき点は、これらの段階が必ずしも時系列的に一方向に進行するわけではないということである。実際のプロジェクトの進行においては、異なる段階の活動が同時並行で行われることが多い。共同体の成熟度は段階的に捉えられるが、現実の芸術活動で

は、第一段階、第二段階、第三段階の要素が重なり合い、同時進行することがある。この複雑な相互作用が、芸術活動を通じた共同体構築のダイナミズムを生み出している。

以上の分析を踏まえ、筆者は実際に地域での芸術実践を試みた。その対象として選んだ中国貴州省の尧古村で芸術活動を展開する際には、地域の特性に応じた適切な方法を選択した。尧古村は中国南西部の少数民族の村落で、近年交通の利便性が向上し、豊かな自然と文化資源を有している。地域振興発展の初期段階にあり、大規模な資金支援の不足や住民の参加度の低さなどを考慮し、本研究では小規模かつ住民の参加を重視した芸術活動に焦点を当てた。これにより、芸術の触媒理論が現実に応用可能であることを検証する。次章では、この点についてより詳細に展開し、議論を深める。

第5章 「儀式感」の作用：貴州での実験と検証

改革開放以来、中国経済は急速に発展し、都市化が継続的に進行している。現在、中国の都市化は質の高い発展段階に入り、都市が地域を支援する能力を有するようになった。そのため、都市部と農村部（地域）の融合発展がより重視されている。2017年、中国共産党第十九次全国代表大会報告で初めて農村振興戦略が提起され、2018年の中央1号文書でこの戦略の全面的な展開が指示された⁸²。中国共産党第二十次全国代表大会報告ではさらに「農村振興の全面推進は新時代における農業強国建設の重要な任務である」と強調し、貧困脱却の成果を固め拡大するには「貧困地域と貧困層の内発的発展力を強化することに注力する」必要があると指摘した⁸³。この一連の政策方針は、地域の「内発的発展力」育成の重要性を浮き彫りにし、中国の農村振興は「輸血型（依存型）」の物質的向上から「造血型（自立型）」の全面的振興へと転換していることを示している。

2020年、中国の農村部は全面的に貧困脱却を実現し、基本的な物質生活施設も著しく改善された。しかしながら、都市化プロセスによる地域人口の継続的な流出は依然として根本的に逆転困難な傾向にある。従来の地域工業化発展モデルは経済発展と地域の収入増加問題をある程度解決したものの、地域の内在的発展力を喚起することは困難であった。そのため、地域自体の魅力を掘り起こし、地域産業のアップグレードとイノベーションを推進することが、地域の全面的振興を実現するための鍵となる。本研究が提案する芸術による地域振興は、この発展理念に合致するものである。地域住民の「儀式感」を喚起することで、人々の日常的な地域生活に対する態度を変え、時代の発展潮流に合致し、かつ地域自体の特徴に適合した新たな共同体の形成を促進する。この芸術的な地域振興モデルは、農村振興に革新的なアプローチを提供するものと考えられる。

芸術が農村振興に与える実際の効果を検証するため、本研究は貴州省尧古村を実践地として選択した。2023年、貴州省教育厅は筆者が所属する貴州轻工職業技術学院芸術デザイン専攻の教員である杜開勇を尧古村の駐村第一書記として派遣し、2年間の地域振興支援

活動を展開することとなった。同時に、「2021年大学生ボランティア夏休み文化科学技術衛生『三下乡』社会实践活动（2021年大中专学生志愿者暑期文化科技卫生“三下乡”社会实践活动）」の要求に基づき、筆者は7月から8月にかけて本校の学生を組織して地域で実践活動を展開する機会を得た。この背景のもと、杜が駐村第一書記を務める尧古村は活動を展開する理想的な選択となった。これにより、村行政とのコミュニケーションが容易になり、活動の展開が改善されただけでなく、村行政の協力を得て地元住民の警戒心を軽減し、後続の活動をスムーズに進めるための基盤を築くことが可能となった。本章では、尧古村で展開された実践活動を詳細に紹介し、芸術活動が尧古村（以下「ヤオグ村」を称ぶ）の具体的な状況においてどのように機能するかを分析する。さらに、芸術を通じて「儀式感」を生み出し、地域共同体の構築を促進する理論の中国的文脈における適用可能性を検証するものである。

第1節 貴州省ヤオグ村における活動展開の背景

ヤオグ村は貴州省黔南布依族苗族自治州荔波県黎明関水族郷に位置し、地域の中心部荔波県から18キロメートルの距離にある。ヤオグ村の面積は29.7平方キロメートルであり、中亜熱帯モンスーン湿潤気候に属し、年平均気温は16.8℃、年間降水量は約1350ミリメートルである。カルスト地形を主とし、岩石や洞窟が多く存在する。森林被覆率は91.58%に達し、貴州茂蘭国家級自然保護区に隣接する生態系の豊かさな自然の生息地である。

2000年、ヤオグ村は初めて村道を舗装し、電力網に接続された。それ以前は、地理的制約と交通の不便さにより、自然環境が文化的な障壁となっていた。長年にわたり外部文化の浸透が困難だったため、地域文化が完全に保存されてきた。プイ族と水族が集中する少数民族の村落として、ヤオグ村は多くのプイ族の伝統的な欄干式吊脚楼建築を保持し、住民の日常生活も独特の少数民族文化を維持している。例えば、絞り染め、織物、古法製紙（竹紙づくり）、酒造り、儺戲などの伝統的な生活経験が今も息づいている。近年、よく保存された民族文化と変化に富んだ地理的環境のおかげで、ヤオグ村はますます注目され

るようになった。2012年には独特の文化と自然資源により、第一次中国伝統的村落リストに選出された。2018年にはさらに貴州省少数民族特色村にも指定された。この状況を受け、地方行政は地域振興の重点を自然環境資源の保護を基礎とし、地域の文化におけるソフトウェアの開発に注力するようになった。『荔波県黎明関水族郷総体計画（2016—2030）』によると、行政は農業観光を基礎とし、レジャーリゾートプロジェクトを拡充し、エコツーリズム村を創出する計画である。同時に、村落のインフラストラクチャーと公共サービスを絶えず改善し、住民の生活満足度を向上に努めている。2020年には、国家の貧困対策政策の支援の下、ヤオグ村は貧困脱却に成功し、その成果を固め、拡大し始めた。2023年までに、少数民族村落の外観修復と改造工事が完了し、伝統的建築様式を保護しつつ、村民の生活環境も向上した。同年、貴南高速鉄道の貴陽市から荔波県までの路線が開通し、省都貴陽市までの交通時間が大幅に短縮され、ヤオグ村の外部交流や観光発展に新たな機会をもたらした。

しかしながら、ヤオグ村は発展過程で多くの課題に直面している。筆者の現地調査によると、1980年代以来の若者の継続的な出稼ぎにより、2021年までに606人が村を離れた。地元の小学校は3年生までしか開設されておらず、高学年の生徒は荔波県や貴陽市で就学せざるを得ず、人口流出をさらに加速させている。2023年8月時点で、村内の常住人口はわずか1217人となり、住民の年齢の二極化が深刻化し、高齢化や留守児童の増加などの問題が顕在化している。日常生活においては、村には娯楽施設が不足しており、住民は主に雑談、テレビ視聴、TIKTOKの閲覧を主な活動としており、伝統的な祝日にのみ集まる傾向がある。基本的な生計は問題ないものの、内在の精神的なニーズを満たすことが困難な状況にある。

地域住民の観光開発への関与については、標準語を流暢に話せる高齢者が限られており、子供たちは地域の文化や技術的知識についての理解が乏しい。住民は地域資源の魅力について深い理解が不足しているため、活動の主体となり得る人材が不足している。現在、住民の地域観光開発への関与は主に観光ルート上での手工芸品の販売に限られている。しか

し、専門的な商品デザインや販売経験の不足により、これらの製品はしばしば観光客を引き付けることが難しく、販売が困難である。さらに懸念されるのは、一部の住民が短期的な利益を追求するために、少数民族の特色ある住居を安価に外部の開発業者に賃貸し、自らは村を離れて都市生活を選択していることである。この現象が続けば、地域特有の魅力が徐々に失われ、最終的には住民が外部からの観光客の「道具」となってしまう可能性がある。

上述の地域背景に基づき、第4章で分析した芸術活動の展開方法を踏まえ、今回のヤオグ村における芸術活動は小規模かつ住民の参加意識を重視する形式を採用することとする。これらの活動は、住民、行政、学校など多様な主体の共同参加を促進し、住民と地域の新たな関係性を再構築することを目的としている。住民の地域への関心を喚起し、地域文化資源への認識を高め、地域の内発的発展力を刺激することを通じて、地域の活性化を図るものである。同時に、これらの活動は芸術活動がいかに関節感とその段階的変化を通じて、地域住民の生活に影響を与えるかを更に検証するものである。これは、前文に提示した「芸術が触媒として地域の新たな共同体構築を促進する」という理論の中国的文脈における適用可能性を探究する上で有益であると考えられる。

第2節 活動実施経緯

ヤオグ村の発展背景を踏まえ、筆者は貴州轻工職業技術学院の張燕平教師と共に、12名の芸術デザイン専攻学生を含む14人の団体「黔起范」（以下QQF）を組織した。QQFは2023年7月7日から16日にかけて、ヤオグ村で「私の目に映るヤオグ村一日常生活環境を再発見する」と「私が発見したヤオグ村一生活経験で再体験する」という二つのシリーズ活動を展開した。本活動は「芸術でエンパワーメント！ヤオグ郷土文化の再発見」をスローガンに掲げた（活動状況は図3参照）。

「私の目に映るヤオグ村一日常生活環境を再発見する」

この活動は、QQF 団体が事前にヤオグ村で調査した現地の自然資源を基に、住民を招いて共同で芸術創作を行うものである。活動は7月7日から16日にかけて、以下の三部構成で展開された。

第一部分：地域対話の契機の構築

地域行政と「ヤオグ小学」の協力を得て、夏休み中の空き教室を活用し、留守児童と帰省学生とともにヤオグ村の魅力を探る討論会を開催した。ワークショップ形式で、筆者は参加者に身近な動植物について再考を促し（活動状況は図4参照）、QQFメンバーは印象的な事物を描くよう指導した（活動状況は図5参照）。活動は地元住民との交流を中心に進め、彼らの描く動植物を通じて日常生活を理解した。同時に、参加者には地元の自然や建築物について独自の視点やアイデアを提案するよう促し、今後の創作活動の基盤を築いた。

第二部分：地域資源を活用したワークショップ

地域行政の協力のもと、ヤオグ村内で日常的に見られる物品を用いた芸術表現体験ワークショップを開催した。このワークショップは7月12日から14日までの3日間、毎日10時から17時まで行われ、住民は都合の良い時間に参加できるようにした。ワークショップの内容は、第一部での住民との討論を踏まえ、2つのテーマに分かれた。1つ目のテーマは地域の自然の再発見に関するもので、第一部で議論し特定した地域固有の動植物を、地元住民の生活でよく見られる木や石などの素材に描いた（活動状況は図6参照）。

2つ目のテーマは、地域特有の欄干式吊脚楼建築の再発見である。QQFメンバーと住民が協力し、地域の廃棄された段ボールと竹を用いて、住民の心に描く理想の村を組み立てた。住民は制作過程で自身の理想の家についての構想に基づき、絵画的手法で作成したモデルに彩色し装飾を施した（活動状況は図7参照）。

第三部分：皆の目に映る新たなヤオグ村の展示

7月15日から16日にかけて、「郷土新発見」と題したヤオグ村初の芸術共創展覧会を開催した（活動状況は図8参照）。従来の美術館での展示とは異なり、この展覧会は住民の

日常生活環境に対する再考を促すことを目的とした。そのため、住民に自作の作品を村内の最も好きな場所に配置するよう依頼した。例えば、自身が描いた図案を村の入口の道路沿いに展示する住民もいた。作品の配置場所を探す過程を通じて、住民が日常の生活環境に再び目を向けるきっかけを作った。この芸術創作活動によってヤオグ村に新たな景観要素が加わり、住民の日常生活環境の魅力に対する再認識を促した（活動状況は図9参照）。

「私が発見したヤオグ村—生活経験を再体験する」

この活動は、住民自身の日常生活経験の魅力に対する認識を変えることを目的とした。住民とQQFが協力し、地元の日常生活経験に基づいて新しい体操の動きを編み出した。同時に、住民の文化娯楽活動への需要に応えるため、QQFはこれらの新たに創作された体操の動きを用いて、ヤオグ村で10日間の小規模な集会活動（毎晩の夕食後にダンスフィットネス活動を行う）を展開した。活動は三部構成で実施された。

第一部分：体操の動きに適した生活経験の選定

QQFは住民の日常生活における経験を実地調査した。その結果、地域で広く応用され、現在も使用されており、製作品の販売も行われている絞り染め技法と、地域で最も長い歴史を持ち、祭祀行事と密接に関連している古法製紙（竹紙づくり）を選択した。これらは地域の特色ある生活経験を代表するものとして、体操の動きに取り入れることとなった。

第二部分：地元住民との対話とコア動作の抽出

QQFは、選択した技法を最も長く継承している2人の高齢者宅を訪れ、絞り染めと古法製紙（竹紙づくり）の技法を学んだ。学習と体験を通じて住民と製作の要点について議論し、両技法の手順を抽出した。絞り染めは地域の少数民族の伝統的な染色工芸で、日用品や衣類の製作に用いられる。この技法をフィットネス体操に取り入れるため、地元の植物による染料加工から始まり、伝統図案の描画、布地の縛り、染料の染み込み、抜糸までの手順を抽出した（活動状況は図10参照）。一方、製紙技術は伝統的な祭日や祖先祭祀に使用する紙の材料を提供するもので、竹の粉碎から始まり、植物由来の液体粘着剤の添加、

紙漉き、加圧脱水、紙の分離までの工程を概括した（活動状況は図11参照）。

第三部分：地域資源を活用した体操活動の展開

絞り染めと古法製紙（竹紙づくり）の具体的な製作工程を抽出した後、これらをフィットネスの動きと融合させ、地元住民の日常生活経験を反映したダンスフィットネス体操を共同で創作した。7月11日から15日までの5日間、每晚19:00から20:00まで村の活動広場にて、住民と共に新たに考案した絞り染めと古法製紙（竹紙づくり）をモチーフとしたダンスフィットネス体操を実施した（活動の様子は図12を参照）。この特色ある活動をより広く周知させるため、QQFはオフラインでのダンスフィットネス活動を展開すると同時に、抖音（TikTok）のライブ配信を通じてオンラインでの普及活動も行った（活動の様子は図13を参照）。

上記の2つの芸術活動は、筆者が地元の特色ある自然資源、伝統文化、独特な建築などに基づいて企画・展開した、住民主体の自由参加型芸術活動である。活動中、筆者は参加住民およびチームメンバーにインタビューを実施した。さらに、活動終了後の8月に再訪し、地域行政と関連住民への二次訪問を行った結果、本研究の芸術活動においても一定の儀式感が生まれたことが判明した。この発見は、芸術が触媒となって地域の新たな共同体構築を促進するモデルと関連付けて、次節で詳細に分析する。

第3節 貴州事例における儀式感の段階的過程の検証及び考察

本章で取り上げるヤオグ村での二つの芸術活動は、主に儀式感変容の第一段階を実現し、第二段階に踏み出し始めたものである。筆者は事前調査を通じ、住民に馴染みのある日常生活環境と経験を活動テーマとして選択し、活動過程及び事後訪問時に芸術活動が住民にもたらした変化を観察した。これらの変化は主に、住民の地域資源に対する認識、参加態度、及び住民間の交流などの面に表れている。

「私の目に映るヤオグ村一日常生活環境を再発見する」活動では、住民を芸術的な視点から自身の生活環境を再観察するよう導くことで、日常的な生活空間に対する固定観念か

ら脱却させ、地域資源に対する新たな認識を喚起し、外部参加者との自発的な交流・共有を促進し、相互の距離を縮めた。例えば、地域特有の魚について議論する際、中学生の欧振家は外部参加者により良く魚を紹介するため、自発的に皆を自宅近くの小川へ案内し、一緒に魚を捕まえる活動を組織した。ヤオグ村第一書記の杜開勇は活動参加後、次のように述べている。

今回の芸術活動は意義深い美育普及であるだけでなく、住民の地域に対する認識を喚起する機会となりました。特に村の子供たちにとって、絵画創作への参加を通じて村の独特な資源について考え、注目するよう導くことができました。このような形式の芸術教育は、住民が地域の美しさを発見し、地域を愛する感情を育むことを促進できると考えます。

住民が活動過程において「芸術家」の視点から日常的なアイデンティティを超越し、馴染みの環境を新たな目で見直し、地域の新たな魅力を発見するという意識の変化は、まさに芸術活動がもたらす第一段階の儀式感の表れである。同時に、活動中に地域行政、住民、QQFメンバー、外部参加者間で初期的な接触が形成され、一時的な共同体が構築された。この関係性の構築は、後続のQQFが住民との共創で「私が発見したヤオグ村一生活経験を再体験する」芸術活動を展開する基盤となった。

「私が発見したヤオグ村一生活経験を再体験する」活動では、さらに住民の参加度を深化させた。この活動は住民との協働で、住民の日常生活で頻繁に用いられる絞り染めと製紙技術を組み合わせて新しい体操の動きを創作し、毎晩の小規模な集会を通じて住民の参加と交流を促進した。動作の創作活動に参加した欧培花は次のように述べている。

このダンスは素晴らしく、毎日参加しています。健康増進になるだけでなく、私の生活と密接に関連しており、踊るととても楽しいです。

参加住民の欧正佳は次のように語った。

以前は祖母が絞り染めをするのを見ているだけでしたが、今回チームと一緒に村の絞り染めと製紙技術を掘り起こし、初めて正式に体験し学ぶことができ、とても興味深かったです。私たちの村にこんなに素晴らしい技術があるとは思いませんでした。次に学校に戻ったら、必ず友達に伝えたいです。

活動はさらにオンライン配信を通じて、より多くの視聴者にヤオグ村住民の生活態度と地域の特色を紹介し、外部からの関心を集め、地域の関係人口の創出を目指した。地域で雑貨店を営む覃姐は次のように述べている。

私たち村民は賑やかなのが好きで、夜に「广场舞」（広場ダンス）の活動があるのは本当に素晴らしいです。最初は何のダンスかわかりませんでしたが、後で私たちの地域の絞り染めと製紙過程をアレンジしたものだを知り、とても面白いと感じました。時々家事で忙しくて参加できないときは、スマートフォンであなたたちのダンスの生配信を見ていて、とても楽しかったです。私は自分の抖音アカウントにあなたたちのダンス動画をアップロードしたところ、予想外に多くの「いいね」をもらいました！

活動はTikTokプラットフォーム上で7月11日から15日まで、毎日の視聴者数が11人から527人に増加し、「いいね」数が524回から6380回に増加した。5回の生配信で合計千人以上のオンライン視聴者を集め、「いいね」回数は2万回を超えた。これらのフィードバックから、住民との協働で地域生活に根ざした芸術活動を展開することで、住民の自主的な参加をより容易に促進できることが明らかである。活動を通じて、住民は地域資源の価値に対する理解を深めた。筆者は、住民の地域資源活用に対する態度の変化が、儀式感の

第二段階への移行傾向を示していると考える。

今回の活動は実施期間が限られていたため、儀式感を直ちに第三段階へ移行させることはできなかったが、既に地域住民の生活に積極的な影響を与えている。芸術活動が長期的に地域で展開された場合の地域共同体構築への影響をさらに理解するため、筆者は「Art at Fuliang」プロジェクトの実施状況を参考にした。このプロジェクトは、2020年に大地の芸術祭の中国認可機関である瀚和文化公司が導入した、「大地の芸術祭」モデルを採用した初の地域芸術プロジェクトである。2021年、プロジェクトは浮梁県臧湾郷寒溪村で初回活動を開催し、大地の芸術祭の経験を活かしつつ、国内外の著名アーティストを村に招いて創作活動を行い、同時に地域住民を組織してボランティア団体「萤火虫隊」を結成し、芸術祭の協働開催を実現した。2023年には第二回の開催に成功している。2020年の準備段階から現在まで、芸術祭は地域に継続的な影響を与え、住民の受動的参加から能動的な企画への転換を促進し、地域の新たな民俗活動「溪望節」を生み出した。これは、長期的に展開される芸術活動が儀式感の三段階の変化を通じて、いかに地域の新たな共同体の構築を促進するかを十分に示している。

第一段階では、芸術家が村の移民の歴史と地域の茶畑をテーマに芸術作品を創作し、外部観光客を引き付け、住民に新たな茶葉販売チャネルを開拓した。住民は芸術活動を通じて収入を増やし、同時に外部観光客との接触過程で、徐々に地域資源の魅力に対する新たな意識を形成し、これは第一段階の儀式感を形成した。

芸術がもたらす新たな生活雰囲気の影響下で、ますます多くの住民が自発的に「萤火虫隊」に参加し、自身の地域生活の物語と芸術家が創作した作品を結びつけて解説を行い、地域の芸術作品の新たな展示形態を形成した。このプロセスを通じて、住民は個人及び地域の移民経験の価値を認識し、受動的参加から能動的にこれらの生活経験を活用し、芸術作品と組み合わせて外部観光客と共有するようになった。この地域生活経験の能動的活用と作品に対する新たな理解の自発的形成は、まさに芸術活動がもたらす第二段階の儀式感の表れである。

活動の継続的な展開に伴い、芸術が創出する新たな生活雰囲気さらに多くの人々が惹きつけられ、地域の「ニュー村民」となり、地域の交流人口を強化した。このプロセスの中で、2022年から住民は自発的に「Art at Fuliang」運営者と協力して地域住民の移住の歴史を記念する活動を展開し、以前は廃れていた地域民俗活動を再び呼び起こし、「溪望節」という新しい名前を付けた。この活動は毎年8月に継続的に開催され、今年までに3回の成功裏の開催を重ねている。「溪望節」の開催は、芸術活動がもたらす第三段階の儀式感の地域への影響を象徴している。

これにより、芸術活動は展示規模を拡大しただけでなく、より重要なのは住民自身の移住の歴史に対する重視を喚起し、かつて廃れていた民俗活動を再活性化したことである。筆者が開催した貴州ヤオグ村芸術活動と「Art at Fuliang」の経験を組み合わせると、ヤオグ村が類似の芸術活動を継続的に展開できれば、儀式感の第三段階への移行を徐々に実現し、最終的に地域に新たな共同体の形成を促す可能性があると推測できる。このプロセスには長期的な努力と多方面の協力が必要である。しかし、芸術活動は触媒として、既に地域の内在的動力を喚起する面で顕著な効果を示している。喜ばしいことに、2024年までにヤオグ村は貴州轻工职业技术学院芸術デザイン専攻を再び招いて芸術活動を展開しており、これは地域が継続的な芸術活動の展開を重視していることを示しており、将来的に儀式感の第三段階を実現するための基盤を築いている。

まとめ

本章では、貴州省ヤオグ村で実践的な芸術活動を展開し、芸術が「儀式感」を喚起することで地域の新たな共同体構築を促進するという理論が、中国の農村振興の文脈においていくつかの補正をくわえることで実践的な適用性を持つことを検証した。この検証を通じて、本研究は中国の農村振興戦略の実施に新たな視点と方法を提供することができた。

第1節では、第4章で提示した芸術活動の展開選択に基づき、ヤオグ村の地理的、文化的、社会経済的背景を分析した。研究により、ヤオグ村が深刻な人口流出、観光開発モデルの人材不足、住民の参加度の低さなどの問題に直面していることが明らかになった。これらの問題の根源は、住民の地域資源の魅力に対する認識不足と地域文化に対する自信の欠如にあることが分かった。そこで、本活動では小規模で住民の参加感を重視する形式を採用し、住民が故郷に再び目を向け、地域の文化資源に対する認識を高め、地域の内発的な活力を喚起することを目指した。

第2節では、実施した二つの主要な活動、「私の目に映るヤオグ村一日常生活環境を再発見する」と「私が発見したヤオグ村一生活経験で再体験する」について詳述した。これらの活動の設計と実施過程は、地域文化と住民の日常生活への深い考慮を十分に反映しており、住民に自身の経験の価値を再認識し、展示する機会を提供した。

第3節では、ヤオグ村での活動期間が限られていたため、活動の実施過程と事後の訪問調査で発見された芸術活動の住民への影響、さらに中国で展開されている大地の芸術祭「Art at Fuliang」プロジェクトの長期的効果を踏まえて分析を行った。研究結果は、芸術活動が触媒として地域の内在的な活力を喚起する面で顕著な効果を示していることを明らかにした。

本章の実地芸術活動の分析を通じて、筆者は提案した芸術触媒理論について、以下に第4章までの理論に対し、中国での実践例を踏まえて得られた修正点、補足点を明記する。

日本の大地の芸術祭のような成功例は、特定の恵まれた条件下で成立した特殊な事例であることが理解された。しかし、小規模な地域、特に中国の農村振興においても、芸術活

動は効果的な触媒として機能しうることが明らかになった。芸術活動を通じて、地域住民と外部の人々との間により容易な交流の機会を創出し、地域と外部との新たなネットワーク構築、および地域内部の仕組みづくりを促進することができる。

1. 地域における芸術活動の最も重要な役割は、人々の意識向上を促進することにある。

芸術活動の過程で視点の転換が起こり、地域住民が地域資源を再認識し評価する「儀式感」が喚起される。この儀式感の生成は、新たな共同体形成の重要な第一歩であり、住民に地域の価値を再考する機会を提供し、地域の内発的発展の原動力を引き出す。

2. 地域の人々に地域への信頼を取り戻させることは、長期的な文化構築のプロセスである。芸術活動を長期的かつ計画的に展開することで、住民の地域文化に対する認識をより効果的に強化し、地域の新たな共同体の構築を促進することができる。継続的な芸術実践を通じて、住民は地域資源の価値を再発見するだけでなく、参加過程で新たな社会的つながりを形成し、これが地域共同体の再構築の基盤となる。

これらの知見は、異なる社会経済的背景における芸術活動の多様な可能性を示唆し、本研究で提案した理論の適用範囲を拡大するものとなった。

終章

本研究は、芸術活動が地域新共同体構築の触媒として果たす役割に焦点を当て、特に「儀式感」の生成を通じてこのプロセスを促進する方法を探究した。理論分析と実践検証を通じて、地域共同体構築における芸術活動の重要性と実現可能性を体系的に論じた。

第1章では、芸術を地域共同体構築の触媒として捉える理論的基盤を構築した。ウェイン・アトンとドン・ローガンの「都市触媒」理論、アグネス・ヘラーの共同体理論、そして日本の芸術活動の変遷を分析することで、芸術が地域共同体構築の触媒となる可能性を明らかにした。

第2章では、「儀式感」という核心的概念を導入し、芸術活動が人々の内面的精神意識に与える影響を深く分析した。伝統的儀式と現代社会のニーズを比較することで、「儀式感」を新たな意識形態として特徴づけ、芸術活動が触媒として地域共同体構築を促進する理論的基礎を補完した。

第3章では、日本の大地の芸術祭の事例分析を通じて、芸術活動が地域新共同体構築の触媒として機能する動的な進化プロセスを明らかにした。研究は3つの重要な段階を特定した。まず、受動的な芸術制作への参加に基づく一時的な共同体の形成、次に、芸術家との協働に基づく芸術制作による持続的な共同体の形成、最後に、住民が能動的に行う芸術活動に基づく内発的な共同体の形成である。3つの重要な段階を特定し、芸術が儀式感の創出を通じて地域のつながりとアイデンティティを構築する過程を示した。

第4章では、「BEPPU PROJECT」と「かめおか霧の芸術祭」の事例分析を通じて、芸術活動が地域共同体構築プロセスを促進するという仮説の普遍性と可能性をさらに検証した。これらの事例は、芸術活動が地域の特性とニーズに応じて柔軟に適応し、効果的に地域発展に寄与することを示した。

第5章では、中国貴州省ヤオグ村での実践活動を通じて、本研究の理論の異文化における適用可能性を検証した。小規模で住民参加型の、「私の目に映るヤオグ村一日常生活

環境を再発見する」と「私が発見したヤオグ村—生活経験を再体験する」という芸術活動を実施し、住民の地域文化資源への認識向上と内発的な力の喚起を実証した。ヤオグ村での小規模かつ参加型の芸術活動を通じて、理論の柔軟性と適応性が実証された。これにより、貴州省をはじめとする中国各地など、さまざまな特性を持つ地域においても「儀式感」の創出と共同体構築が可能であることが明らかとなり、本理論の普遍的な応用可能性が示された。

本研究の結果、芸術活動が「儀式感」の創出を通じて、地域新共同体構築の触媒として重要な役割を果たすことが明らかとなった。この過程において、芸術活動は住民の地域文化再認識を促進し、内発的発展の原動力を喚起し、新たな地域共同体の構築を推進する。この発見は、文化的背景や経済状況が異なる多様な地域においても、適切な修正を加えることで適用可能であり、地域新共同体構築に新たな視点と方法を提供するものである。

さらに、本研究は芸術による地域振興が文化主導の系統的なプロジェクトであることを示した。その核心的価値は、直接的な経済効果だけでなく、地域住民の精神的高揚、地域と外部との交流促進、そしてそれらによって引き起こされる持続可能な発展メカニズムにある。これらの知見は、グローバルな文脈における地域振興策としての可能性も示唆するものである。

今後の研究課題として、この理論モデルのより広範な地域や文化的背景への適用方法、各地域の特性に応じた修正手法の体系化、および長期的実践における芸術活動の影響の継続的評価と最適化方法の探究が挙げられる。これらの課題に取り組むことで、芸術活動を通じた地域新共同体構築の理論と実践をさらに発展させ、グローバルな視点から地域振興に貢献することが期待される。

(54, 427 字)

註

- ¹ OECD『地図でみる世界の地域格差 OECD 地域指標2022年版一都市集中と地域発展の国際比較』中澤高志・鋤塚賢太郎・松宮邑子・甲斐智大・申知燕訳、明石書店、2023年、pp. 68-73。
- ² 電通総研・同志社「大学第7回『世界価値観調査』ポート最大77か国比較から浮かび上がった日本の特徴」2021年、p. 3。 <https://qos.dentsusoken.com/wp-content/uploads/2022/07/【世界価値観調査】Appendix20220727revised.pdf>（2024年10月14日閲覧）
- ³ 酒井崇匡・加藤博司「ポパイ・JJ世代が時代の節目？日本人の価値観変化をデータで検証」日経クロストrend、2024年。 <https://xtrend.nikkei.com/atcl/contents/18/00401/00052/>（2024年10月14日閲覧）
- ⁴ 国土交通省「国民意識調査」HP <https://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/r02/hakusho/r03/html/n1233000.html>（2024年10月14日閲覧）
- ⁵ Miwon Kwon, *One Place after Another : Site-Specific Art and Locational Identity*, Cambridge, Massachusetts. The MIT Press, 2004, p. 211.
- ⁶ 吉澤弥生『芸術は社会を変えるか？文化生産の社会学からの接近』青弓社、2011年、p. 97。
- ⁷ 渡辺直子『山崎亮とゆくコミュニティデザインの現場：コミュニティデザイナー』織研新聞社、2013年、p. 3。
- ⁸ グラント・ケスター「ソーシャリー・エンゲイジド・アートにおける理論と実践の関係について」『ソーシャリー・エンゲイジド・アートの系譜』フィルムアート社、2018年、pp. 110-118。
- ⁹ 向麗（向麗）、「怀旧・乡愁・乌托邦：中国艺术乡建的三重向度」（乡愁・ノスタルジア・ユートピア：中国における芸術を通じた農村振興の三つの視点）、民族艺术（民族芸術）、2021年、p. 4。
- ¹⁰ 渠岩・屈行甫、『中国艺术乡建地图』（中国における芸術を介した農村振興の地図）、上海三联书店、2024年、p. 13。
- ¹¹ 王晓丹（王曉丹）、「论旅游中的仪式与仪式感」（旅行の儀式と儀式感）、东北财经大学研究生论文（東北財経大学修士論文）、大连市、东北财经大学、2014年、p. 22。
- ¹² 「请别弄丢仪式感」（どうか儀式感を失わないでください）、『武汉晚报』（武漢夜新聞）、2015年11月27日より
- ¹³ Wayne Attoe, Donn Logan, *American Urban Architecture Catalysts in the Design of Cities*, Oakland, University of California Press, 1989, p. 45.
- ¹⁴ ベルセリウス『化学の教科書』田中豊助・原田紀子共訳、内田老鶴圃、1989年、p. 145。
- ¹⁵ artscapeHP <https://artscape.jp/artword/6814/>（2024年10月8日閲覧）
- ¹⁶ ジェイン・ジェイコブズ『アメリカ大都市の死と生』山形浩生訳、鹿島出版会、2010年、p. 270。
- ¹⁷ Wayne Attoe, Donn Logan, *op. cit.*, p. 47.
- ¹⁸ Wayne Attoe, Donn Logan, *op. cit.*, p. 45.
- ¹⁹ Wayne Attoe, Donn Logan, *op. cit.*, p. 46. ①新しい要素（触媒）が導入されると、その地域の既存の要素に変化を与える反応が起こること。触媒は経済的なものと考えられがちだが（投資によって投資が生まれる）、社会的、法律的、政治的、建築的なものもある。②既存の価値ある都市の要素が、前向きに強化または変換される。新しいものは古いものを消し去ったり、価値を下げたりする必要はなく、それを再生させることができる。③触媒反応は、周囲の環境を壊さないようにコントロールされている。触媒力を放つだけでなく、反応効果をコントロールする必要があるのだ。④触媒反応を適切に予測できるように、必要な要素を理解した上で受け入れなければいけない。そして、都市はそれぞれ異なるので、都市デザインは一律に考えることはできない。⑤すべての触媒反応の化学反応はあらかじめ決まっているわけではなく、すべての状況に対して単一の式を指定することはできない。

⑥触媒設計は戦略的なものである。都市変革は、単純な介入から生まれるのではなく、将来の都市形態に影響を与えるために、慎重に段階を踏んで計算することから生まれるものである。（都市触媒に成功の秘訣はないが、あらゆる触媒的反応には戦略的な方法が必要である）。⑦触媒反応の目的では、その要素の総和を超えた反応、つまり孤立した断片ではなく、全体としての都市を想像させるような総和を生み出すことである。⑧触媒は反応の過程で消費される必要はなく、識別可能であり続けることができる。より大きな全体の一部となれば、そのアイデンティティを失う必要はない。（多くの住宅所有者、居住者、建築家といった個人の存在が、街を豊かにしていくのである。）（論文執筆者訳）

²⁰ 矢萩喜徳郎『建築 触媒 身体』エクスナレッジ、2006年、p. 11。

²¹ Ágnes Heller, *Everyday Life*, London, Routledge, 2015, p. 34.

²² Ágnes Heller, *op. cit.*, p. 36.

²³ 桜井徳太郎・谷川健一・坪井洋文・宮田登・波平恵美子『ハレ・ケ・ケガレー共同討議』青土社、1984年、p. 23。

²⁴ アグネス・ヘラー『個人と共同体』良知力・小箕俊介、東京法政大学出版局、1979年、pp. 37-39。

²⁵ 阿格妮丝・赫勒（アグネス・ヘラー）、衣俊卿, ed.、《道德哲学》哈尔滨、黑龙江大学出版社、2014年、p. 255.

²⁶ 熊倉純子「アートプロジェクトの美的・社会的価値についての考察」熊倉純子・長津結一郎・アートプロジェクト研究会『日本型アートプロジェクトの歴史と現在 1999-2012年補遺』田村かのこ・相磯展子・海老原周子（Art Translators Collective）、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、2016年、p. 33。

²⁷ 伊藤守・小泉秀樹・三本松政之・似田貝香門・橋本和孝・長谷部弘・日高昭夫・吉原直樹（編）『コミュニティー事典』春風社、2017年、p. 4。

²⁸ 広井良典『人口減少社会のデザイン（Kindle版）』東洋経済新報社、2019年、p. 91。

²⁹ 石山千代「観光まちづくりのこれまでとこれから」西村幸夫＋國學院大學地域マネジメント研究センター編『観光まちづくりの展望観光まちづくりの展望 地域を見つめ、地域を動かす』学芸出版社、2024年、pp. 27-28。

³⁰ UBE BIENNALE HP <https://ubebiennale.com/about/>（2023年6月15日閲覧）

³¹ 古川彰・松田素二「観光という選択—観光・環境・地域おこし」古川彰・松田素二編『観光と環境の社会学』新曜社、2003年、p. 7。

³² 柳澤有吾『パブリックアートの現在』かもがわ出版、2017年、p. 11。

³³ 『現代美術を知るクリティカル・ワーズ』によると、「サイト・スペシフィック」とは、「特定の場所、特定の空間と分かちがたく結びつき、そのような不可分の関係性の中で成立する美術作品のあり方を指す。」具体的な表現の形としては、インスタレーション、アースワークなどを挙げることができる。暮沢剛巳編『現代美術を知るクリティカル・ワーズ』フィルムアート社、2002年、p. 89。

³⁴ 同町に拠点を置く舞踏資源研究所（代表・田中泯）とアート・プロデューサーの木幡和枝が中心になって運営されており、舞踏のパフォーマンス公演を中心に、美術、演劇、音楽、映像などさまざまなジャンルの表現活動がワークショップやコラボレーションといった形で行なわれる。また、参加アーティストの多くが同町に定住して農業を営んでいることから、多くの表現に農業が取り入れられていることも特徴のひとつ。

³⁵ 前田礼・戸谷莉維裳、市原湖畔美術館編『試展—白州模写「アートキャンプ白州」とは何だったのか』現代企画室、2022年、p. 28。

³⁶ 吉澤弥生前掲書（6）p. 255。

³⁷ J・E・ハリソン『古代芸術と祭式』佐々木理訳、筑摩書房、1997年、p. 193。

³⁸ 王晓丹（王曉丹）前掲論文（11）p. 22。

³⁹ 崔露什、「儀式感的現代性阐述」（儀式感の現代的な解説）、陝西师范大学研究生论文（陝西師範大学修士論文）、西安市、陝西师范大学、2013年、p. 12。

⁴⁰ 郭軼佳『現代中国社会における「儀式感」の研究—高度スペクタクル社会と写真』千葉大学、2022年、p. 186。

⁴¹ Ágnes Heller, *op. cit.*, p. 107.

- ⁴² 山田真茂留『非日常性の社会学』学文社、2010年、はじめ。
- ⁴³ Agnes Heller, *op. cit.*, p. 108.
- ⁴⁴ 北澤潤『「もうひとつの日常」を生み出すアートプロジェクトに関する研究』東京藝術大学、2015年、p. 37。
- ⁴⁵ 市川寛也『『農民藝術』概念の現代的解釈をめぐって地域芸術論としての側面を中心に』『美術教育学研究』大学美術教育学会、2019年、p. 31。
- ⁴⁶ ハリソン前掲書(37)、pp. 28-29。
- ⁴⁷ ハリソン前掲書(37)、p. 127。
- ⁴⁸ ハリソン前掲書(37)、p. 127。
- ⁴⁹ ファン・ヘネップ『通過儀礼』綾部恒雄・綾部裕子訳、岩波書店、2012年、p. 30。
- ⁵⁰ 『週報とおかまち』1998年12月18日号によると、「湯水のごとく税金を使うな。前衛芸術で産業経済(が)活性化できるか」という地域住民からの強い反対と疑問の声が上がったことが報告されている。このような反応は、芸術祭の初期段階における地域住民の懸念と不信感を如実に表しているものである。
- ⁵¹ 岡部昌生「北と南一ふたつの〈近代〉を掘るフロッタージュ・プロジェクト-1」『札幌大谷大学紀要』2010年、p. 129。
- ⁵² 越後妻有大地の芸術祭実行委員会編『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2000』現代企画室、2001年、p. 204。
- ⁵³ 大地の芸術祭・花の道実行委員会東京事務局『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2003』現代企画室、2004年、p. 219。
- ⁵⁴ 大地の芸術祭前掲書(53) p. 219。
- ⁵⁵ 大地の芸術祭前掲書(53) p. 222。
- ⁵⁶ 大地の芸術祭東京事務局編『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2006』現代企画室、2007年、p. 198。
- ⁵⁷ 北川フラム『美術は地域をひらくー大地の芸術祭10の思想』現代企画室、2014年、p. 89。
- ⁵⁸ 新潟県庁 HP <https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/chiikiseisaku/1356882103993.html> (2024年5月16日閲覧)
- ⁵⁹ 北川前掲書(57) p. 89。
- ⁶⁰ アートスケープ HP https://artscape.jp/report/review/10115170_1735.html (2024年5月21日閲覧)
- ⁶¹ 2022年10月30日 16:30 新潟県小荒戸村でのインタビューより。
- ⁶² ONESTORY HP <https://www.onestory-media.jp/post/?id=783> (2024年5月24日閲覧)
- ⁶³ キジマ真紀の小荒戸日和 HP <https://kijimamaki.exblog.jp/11681433/> (2024年5月27日閲覧)
- ⁶⁴ 松代おやっ村 HP <http://matsudai-oyakkomura.blogspot.com/2015/03/2015.html> (2024年5月27日閲覧)
- ⁶⁵ 小荒戸村掲示板のポスター中の言葉(2022年10月30日小荒戸村現地調査にて確認)。
- ⁶⁶ 同上
- ⁶⁷ 太田隆之「観光地再生のための政策課題と地域政策の可能性・方向性」『静岡大学経済研究センター研究叢書』巻8、静岡大学経済研究センター、2010年、p. 22-23。
- ⁶⁸ 別府市 HP <https://www.city.beppu.oita.jp/sisei/sinogaiyou/detail11.html> (2024年10月2日閲覧)
- ⁶⁹ 山出淳也「地域とアートプロジェクトの現状ー BEPPU PROJECT の活動」『アートマネジメントを学ぶ』武蔵野美術大学出版局、2018年、p. 312。
- ⁷⁰ 山出淳也前掲書(69) pp. 312-313。
- ⁷¹ 山出淳也前掲書(69) p. 321。
- ⁷² BEPPU PROJECT HP『混浴温泉世界実行委員会 令和5年度事業報告書』
<https://www.beppuproject.com/a/5ba4e8f38808389e85505b12ee3f4773.pdf> (2024年10月2日閲覧)
- ⁷³ 経済産業省 HP「事業実施報告書」
https://www.meti.go.jp/meti_lib/report/2022FY/050757.pdf
(2024年9月23日閲覧)
- ⁷⁴ BEPPU PROJECT HP『混浴温泉世界実行委員会 令和5年度事業報告書』

<https://www.beppuproject.com/a/5ba4e8f38808389e85505b12ee3f4773.pdf> p. 56。(2024年10月1日閲覧)

⁷⁵ 山出淳也前掲書(69) p. 312。

⁷⁶ 地方創生☆政策アイデアコンテスト

2019HP<https://contest.resasportal.go.jp/2019/asset/files/works/23.pdf> (2023年7月1日閲覧)

⁷⁷ RESAS Portal 地域経済分析システム RESAS の利活用サイト HP https://resas-portal.go.jp/medias-import/A190050_contest.pdf (2023年7月1日閲覧)

⁷⁸ 松井利夫「霧芸のはじまり」持田博行『かめおか霧の芸術祭 ARCHIVE BOOK 2022』かめおか霧の芸術祭実行委員会、2023年、p. 9。

⁷⁹ 持田博行『かめおか霧の芸術祭 ARCHIVE BOOK 2023』かめおか霧の芸術祭実行委員会、2024年、p. 35。

⁸⁰ 持田博行前掲書(79) p. 35。

⁸¹ 2023年6月30日 15:30 亀岡市市役所B1開かれたアトリエでのインタビューより。

⁸² 中国国際放送局 HP <https://japanese.cri.cn/20210419/64d382b8-a23d-7ab6-eef6-dae1a059a021.html> (2024年10月13日閲覧)

⁸³ 中華人民共和国中央人民政府 HP https://www.gov.cn/xinwen/2023-03/15/content_5746861.htm (2024年10月13日閲覧)

参考文献：

（年代順に並べる）

1. アグネス・ヘラー『個人と共同体』良知力・小箕俊介、東京法政大学出版局、1979年。
2. 桜井徳太郎・谷川健一・坪井洋文・宮田登・波平恵美子『ハレ・ケ・ケガレ―共同討議』青土社、1984年。
3. ベルセリウス『化学の教科書』田中豊助・原田紀子共訳、内田老鶴圃、1989年。
4. 塩見譲『地域活性化と地域経営（シリーズ自治を創る）』学陽書房、1989年。
5. Wayne Attoe, Donn Logan, *American Urban Architecture Catalysts in the Design of Cities*, Oakland, University of California Press, 1989.
6. J・E・ハリソン『古代芸術と祭式』佐々木理訳、筑摩書房、1997年。
7. 越後妻有大地の芸術祭実行委員会編『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2000』現代企画室、2001年。
8. 暮沢剛巳編『現代美術を知るクリティカル・ワーズ』フィルムアート社、2002年。
9. 古川彰・松田素二編『観光と環境の社会学』新曜社、2003年。
10. 大地の芸術祭・花の道実行委員会東京事務局『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2003』現代企画室、2004年。
11. 青木保『儀礼の象徴性』岩波書店、2006年。
12. 濱田琢司『民芸運動と地域文化：民陶産地の文化地理学』思文閣出版、2006年。
13. 矢萩喜徳郎『建築 触媒 身体』エクスナレッジ出版、2006年。
14. 大地の芸術祭東京事務局編『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2006』現代企画室、2007年。
15. 佐々木雅幸・水内俊雄『創造都市と社会包摂 文化多様性・市民知・まちづくり』水曜社、2009年。
16. 阿格妮丝・赫勒（アグネス・ヘラー）『日常生活』衣俊卿訳、哈尔滨、黑龙江大学出版社、2010年。

17. 方李莉『西部人文資源論壇文集』（西部人文資源論壇文集）学苑出版社、2010年
18. 岡部昌生「北と南—ふたつの＜近代＞を掘るフロッタージュ・プロジェクト-1」『札幌大谷大学紀要』2010年。
19. 山田真茂留『非日常性の社会学』学文社、2010年。
20. 太田隆之「観光地再生のための政策課題と地域政策の可能性・方向性」『静岡大学経済研究センター研究叢書』巻8、静岡大学経済研究センター、2010年。
21. 山崎亮『コミュニティデザイン—人がつながるしくみをつくる』学芸出版社、2011年。
22. 吉澤弥生『芸術は社会を変えるか？文化生産の社会学からの接近』青弓社、2011年。
23. ファン・ヘネップ『通過儀礼』綾部恒雄・綾部裕子訳、岩波書店、2012年。
24. 山崎亮『コミュニティデザインの時代—自分たちで「まち」をつくる』中央公論新社、2012年
25. 崔露什、「儀式感的現代性阐述」（儀式感の現代的な解説）、陕西师范大学研究生论文（陝西師範大学修士論文）、西安市、陕西师范大学、2013年。
26. 渡辺直子『山崎亮とゆくコミュニティデザインの現場：コミュニティデザイナー』織研新聞社、2013年。
27. 阿格妮丝・赫勒（アグネス・ヘラー）、『道德哲学』（道德哲学）衣俊卿訳、哈尔滨、黑龙江大学出版社、2014年。
28. 北川フラム『美術は地域をひらく—大地の芸術祭10の思想』現代企画室、2014年。
29. 佐々木雅幸、川井田祥子、萩原雅也『創造農村：過疎をクリエイティブに生きる戦略』学芸出版社、2014年。
30. 王晓丹（王曉丹）、「论旅游中的仪式与仪式感」（旅行の儀式と儀式感）、东北财经大学研究生论文（東北財經大学修士論文）、大连市、东北财经大学、2014年。
31. 熊倉純子監修、菊地拓児・長津結一郎編『アートプロジェクト芸術と共創する社会』水曜社、2014年。
32. Ágnes Heller, *Everyday Life*, London, Routledge, 2015.

33. 北川フラム『ひらく美術：地域と人間のつながりを取り戻す』筑摩書房、2015年。
34. 北澤潤『「もうひとつの日常」を生み出すアートプロジェクトに関する研究』東京藝術大学、2015年。
35. 高台泳「地域再生におけるグラフィックアートの意義と可能性に関する調査研究 韓国・釜山の事例を中心に」『芸術工学2015』神戸芸術工科大学、2015年。
36. クレア・ビショップ（Claire Bishop）、『人工地獄 現代アートと観客の政治学』（Kindle）大森俊克訳、フィルムアート社、2016年。
37. 熊倉純子・長津結一郎・アートプロジェクト研究会『日本型アートプロジェクトの歴史と現在1999—2012年補遺』田村かのこ・相磯展子・海老原周子（Art Translators Collective）、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、2016年。
38. 藤田直哉『地域アート：美学／制度／日本』堀之内出版、2016年。
39. 伊藤守・小泉秀樹・三本松政之・似田貝香門・橋本和孝・長谷部弘・日高昭夫・吉原直樹編『コミュニティー事典』春風社、2017年。
40. 原田保・西田小百合「“スピリチュアリティ”の地域デザインへの活用」『スピリチュアリティによる地域価値発見戦略』学文社、2017年。
41. 柳澤有吾『パブリックアートの現在』かもがわ出版、2017年。
42. アート＆ソサイエティ研究センターSEA研究会・トム フィンケルパール・グラント ケスター・星野太・高山明・藤井光・カリィ コンテ・ジャスティン ジェスティ『ソーシャリー・エンゲイジド・アートの系譜』フィルムアート社、2018。
43. 方李莉「论艺术介入美丽乡村建设—艺术人类学视角」（芸術が美しい農村づくりに介入することについて—芸術人類学の視点から論じる）『民族艺术』（民族芸術）2018年。
44. 新見隆・伊東正伸・加藤義夫・金子伸二・山出淳也『アートマネジメントを学ぶ』武蔵野美術大学出版局、2018年。
45. 広井良典『人口減少社会のデザイン（Kindle版）』東洋経済新報社、2019年。

46. 黄勇・黄晓「贵州民族特色村寨保护与乡村振兴路径思考」『貴州民族研究40卷』贵州省民族研究院、2019年。
47. 磯貝政弘「アートプロジェクトと観光、その現状と展望」『跡見学園女子大学観光コミュニティ学部紀要』跡見学園女子大学、2019年。
48. 市川寛也「『農民藝術』概念の現代的解釈をめぐって地域芸術論としての側面を中心に」『美術教育学研究』大学美術教育学会、2019年。
49. 申紅田「触媒視角下大城市中心区軌道交通站域更新策略研究」天津大学博士生論文（天津大学博士論文）、天津市、天津大学、2019年。
50. 谷口文保『アートプロジェクトの可能性—芸術創造と公共政策の共創』九州大学出版会、2019年。
51. ヴィクター・W・ターナー『儀礼の過程』富倉光雄訳、筑摩書房、2020年
52. 吳嘉振「日本艺术乡建研究及启示」（日本における芸術を活用した農村振興の研究とその示唆）中国美术学院博士生論文（中国美术学院博士論文）、杭州市、中国美术学院、2020年。
53. 山田七絵・松永光平「地域資源をいかした持続可能なコミュニティ構築のための都市・農村間連携：中国貴州省の少数民族地域における2017年・2018年調査から」『近畿大学総合社会学部紀要』近畿大学総合社会学部、2020年。
54. 木下齊『まちづくり幻想 地域再生はなぜこれほど失敗するのか』SBクリエイティブ、2021年。
55. 向麗（向麗）、「怀旧・乡愁・乌托邦：中国艺术乡建的三重向度」（郷愁・ノスタルジア・ユートピア：中国における芸術を通じた農村振興の三つの視点）、民族艺术（民族芸術）、2021年。
56. 吉田隆之『芸術祭と地域づくり“祭り”の受容から自発・協働による固有資源化へ』水曜社、2021年。
57. 加藤種男『祝祭芸術 再生と創造のアートプロジェクト』水曜社、2022年

58. 郭軼佳『現代中国社会における「儀式感」の研究—高度スペクタクル社会と写真』千葉大学、2022年。
59. マイケル・S-Y・チェ『儀式をゲーム理論で考える—協調問題、共通知識とは』安田雪訳、みすず書房、2022年。
60. 前田礼・戸谷莉維裳、市原湖畔美術館編『試展—白州模写「アートキャンプ白州」とは何だったのか』現代企画室、2022年。
61. 田代洋久『文化力による地域の価値創出—地域ベースのイノベーション理論と展開』水曜社、2022年。
62. 田中淳一『地域の課題を解決するクリエイティブディレクション術』宣伝会議、2022年。
63. 国立歴史民俗博物館・川村清志・天野真志編『REKIHAKU 特集・アートがひらく地域文化』文学通信、2023年。
64. 狭間恵三子『瀬戸内国際芸術祭と地域創生：現代アートと交流がひらく未来』学芸出版社、2023年。
65. 北川フラム『越後妻有里山美術紀行』現代企画室、2023年。
66. 上村博「場所固有性の概念の出自と機能」『京都芸術大学紀要』号27、京都芸術大学、2023年。
67. 渡邊淳司・ドミニク・チェン『ウェルビーイングのつくりかた「わたし」と「わたしたち」をつなぐデザインガイド』ビー・エヌ・エヌ、2023年。
68. 持田博行『かめおか霧の芸術祭ARCHIVE BOOK 2022』かめおか霧の芸術祭実行委員会、2023年。
69. 石山千代・下間久美子・藤岡麻理子・下村彰男・劉銘・石垣悟・堀木美告・小林裕和・児玉千絵・塩谷英生・十代田朗・浅野聡・梅川智也・河尻珍・南雲勝志・米田誠司・椎原晶子著、西村幸夫＋國學院大學地域マネジメント研究センター編『観光まち

づくりの展望観光まちづくりの展望 地域を見つめ、地域を動かす』学芸出版社、
2024年。

70. 渠岩・屈行甫『中国艺术乡建地图』（中国における芸術を介した農村振興の地図）
上海市、上海三联书店、2024年。

71. 鈴木信吾『日本一わかりやすい地方創生の教科書—全く新しい45の新手法&新常識』
東洋経済新報社、2024年

72. 西村幸夫＋國學院大學地域マネジメント研究センター編『観光まちづくりの展望観光
まちづくりの展望 地域を見つめ、地域を動かす』学芸出版社、2024年。

資料一覧

- ① 胡藝航、《日本の地域芸術活動現地調査ファイル》インフォグラフィックデザイン、紙にインクジェットプリント、1118mm・1508mm、10枚、2024年。
- ② 胡藝航、《中国貴州ヤオグ村印象》インフォグラフィックデザイン、紙にインクジェットプリント、1118mm・3000mm、1枚、2024年。
- ③ 胡藝航、《私の目に映るヤオグ村—日常生活環境を再発見する》立体作品、ダンボール・ビニール、2000mm-2500mm・300mm・300mm（サイズ可変）、4個、2023年、個人蔵、論者撮影。
- ④ 胡藝航、《私が発見したヤオグ村—生活経験で再体験する》インフォグラフィックデザイン、紙にインクジェットプリント、1100・3200mm、1枚、2023年。
- ⑤ 胡藝航、《地域における生活リズムの再構築を目指す芸術活動の研究—活動開催記録》映像ビデオ、時間1分50秒、2023年。



① 胡藝航、《日本の地域芸術活動現地調査ファイル》インフォグラフィックデザイン、紙にインクジェットプリン

ト、1118mm・1508mm、10枚、2024年。



AICHI TRIENNALE

愛知国際芸術祭「あいち2022」は地方都市における芸術祭の特徴のひとつ。地域再発見という観点からは、愛知県の誇る歴史・地場産業・伝統文化などを視野に入れ、現代を起点にそれらをいかに蘇らせられるのかを探究する。同時に世界各地のローカルをいかにグローバルに繋げていくのかという問いにも、クリエイティブに回答していく。

●常滑地区2.58km² ●常滑市55.9km²
●一宮113.8km² ●愛知芸術文化センター

2022年愛知国際芸術祭の会場の一つである常滑市は、平安時代末期頃から「古常滑」と呼ばれる焼き物の産地として知られる。瀬戸、信楽、越前、丹波、備前と並び、日本遺産に認定された日本六古窯の一つである。江戸時代以降は急須、明治時代からは土管、タイルなど時代に合わせた焼き物を生産し、現在でも窯業は主産業となっている。

常滑エリアの基礎情報

人口:57,978人(2022年)
面積:55.90km²
愛知駅まで:31分(徒歩)

陶芸の歴史を学ぶ

常滑地域の伝統工芸を踏まえた作品、あるいは町の風景を通じて、陶芸を始めた。常滑という地域の歴史や文化を感じることができ、改めて常滑のポテンシャルの高さに気づかされる。

①とこなめ陶の森
古くからの常滑の人々と焼き物とのかわりを学ぶことができる施設である。展示室には、国指定の重要有形民俗文化財である、常滑の陶器の生産用具及び製品1,655点のうち約300点を展示している。国の重要有形民俗文化財に指定された、常滑焼の生産用具や窯跡から出土した壺等を展示され、常滑焼の歴史が勉強できる。

②INAXライブミュージアム
「窯のある広場・資料館」「世界のタイル博物館」「土・どろんこ館」「陶楽工房」「やきもの工房」「建築陶器のはじまり館」6つの館からなり、ものづくりを見て、学んで、体験できる参加型の施設である。随時イベントも実施している。

日常に陶芸を感じる

常滑焼は現在、急須などの「茶器」をはじめ、保存や熟成を得意とした「甕」、料理の質を高める「すり鉢・砥石」、樹木の成長を促し魅せる「盆栽鉢・植木鉢」、運氣を高める「損き猫」、癒やしや差を追及した「土人形・陶彫」、そして食を豊かにする食器など、そのほか多様な焼き物がつくられ、多くの人々に愛されている。

①やきもの散歩道
1.6kmで所要時間は約60分。レンガ通りの煙突や窯、黒煙の工場、陶器の廃材利用の坂道など、独特の雰囲気と歴史を伝える空間である。

②陶芸ワークショップ
住まいの素材であり、焼き物の原料である土。土をふんだんに使った建築・食器の温もりや気持よさを感じる「やきもの散歩道」で、土の展示や体験教室を開催している。土に触れ、遊び、体感することで、土の無限の表情に出会い、その魅力や可能性を発見する。

③常滑焼まつり
常滑焼まつりは2017年から始まり、今年には「つくろ人、つなげる人、つかう人、みなさんやつとためだね」というコンセプトで開催した。この祭りがきっかけで、常滑焼の魅力を多くの人々に再認識させた。同時に、伝統的な常滑焼の持続的な発展と技術と理念の継承に努めていく。

陶芸を通じた交流拠点の構築

常滑市内の作品は、常滑の大地の恵み、火、水、空気といった自然の力から生まれる陶芸や、「土」の文化に根ざした表現。また、常滑の窯業の歴史からインスパイアされた。多数の作品は常滑の「やきもの散歩道」に沿って展示されている。

作品展示場所
①INAXライブミュージアム

- ②旧丸利陶管
- ③廻船問屋 藤田家
- ④常々
- ⑤旧青木製陶所
- ⑥旧急須店 舊・旧鮮魚店

地域伝統技法を活かした芸術活動

① 胡藝航、《日本の地域芸術活動現地調査ファイル》:「国際芸術祭『あいち』」・インフォグラフィックデザイン、

紙にインクジェットプリント、1030mm・1456mm、2枚、2024年。



ECHIGO TSUMARI ART FIELD

越後妻有大地の芸術祭は「交流人口の増加」「地域の情報発信」「地域の活性化」を目的としたアートプロジェクトである。「人間は自然に内包される」を理念に、地域の土地を美術館に見立て、アーティストと地域住民とが協働し地域に根ざした作品を制作、継続的な地域展覧を拓く活動をしている。

● 1 上道 10.21km² ● 2 日野 12.16km² ● 3 山 96.31km²
● 4 津田 10.21km² ● 5 松代 90.47km² ● 6 川西 73.55km²

松代は、大地の芸術祭の本拠地であり、周囲を山々に囲まれた丘陵地帯である。交通手段が発達する昭和40年代頃までは、特に冬になると周辺地域との行き来が難しく、陸の孤島ともいわれていた。主な産業は稲作だが、松代の農耕文化には、山の斜面を切り開いた棚田、川の流れを変えて田んぼにした瀬田など、厳しい自然と向き合って生きていくための常なる工夫や知恵をみることができる。

松代エリアの基礎情報

人口: 4,245人 (2023年)

面積: 90.47km²

新潟駅まで: 114km

非効率な展示の方法

大地の芸術祭の作品は非効率な展示の方法で農村部に満ちて配られ、来場者に多くの展示を自分の足で周るよう仕向けることで、来場者に普段は気付く事のない里山の魅力や自然の豊かさを肌で感じてもらおうことを目的としている。

① 棚田
デザイナー: イリヤ&エミリア・カバコフ (ロシア)
伝統的な稲作の情景を詠んだテキストが配置され、淡海川の対岸には、農作業をする人々の姿を象った彫刻が見える。展望台から見ると1枚の絵のように両者が融合する。

② まつだい雪国農耕文化村センター
農舞台 デザイナー: MVRDV
新潟県十日町松代に現代美術を収蔵する美術館・郷土資料館である。

③ 奴奈川キャンパス
2014年3月に閉校となった奴奈川小学校は、地域の価値を美意識に学ぶ学校として再生されたものである。農業を基盤とし、食・生活・遊び・踊りを通じて、一人ひとりの得意分野を掘り起こしていく場を提供している。2024年には「子ども五感体験美術館」として、「見ること」以外の要素を含む、全身で体験するアートを展開する計画が立てられている。

食文化を構築する

長く受け継がれた地域の味を大切に、四季折々の旬の食材を取り入れたメニューを提供している。食文化に関するイベントや商品開発を通して、多くの人と心温まる交流の機会を構築している。越後妻有の豊かな食文化を地域外へ発信すること行っていく。

① 越後まつだい里山食堂
水色の店内は、一面ガラス貼りの窓と鏡のテーブルに松代住民の自宅の窓から見える四季の風景が映り込むアート作品の空間である。目の前に広がる棚田の風景と里山を眺めながら、まつだいの食を楽しむ体験ができる。

② 開発商品「大地の米」
400年以上の昔から、先人たちの苦労によって生み出された美しい棚田で多くの労力をかけてやっと収穫したお米である。越後妻有地域は昼夜の寒暖差が激しいため、山の雪解け水など豊かできれいな水を豊富に含み抜けるお米が生み出される。「大地の米」の売り上げの一部は棚田保全資金になる。

農業の復活を誘発する

新潟県十日町市松代(まつだい)は、「里山の棚田」をはじめとした、日本有数の棚田が広がる地域である。棚田はおいしいお米を育てる土壌や、景観地としてだけでなく、山を支え、川を守り、空気をきれいにし、多くの生きものに住処を提供してきた。しかし、棚田での耕作は労力を要し、今では担い手が少なくなっている。

① まつだい棚田バンクプロジェクトは、担い手がなくなった棚田を借り受けて耕作し、地域外からその棚田の「里親」を募集している。収穫したお米を居けるほか、「里親」の方が参加できる農作業イベントを開催して、「里親」や地元住民、アーティスト、企業や学生など、多種多様な人々とともに、里山の環境を守る活動を行っている。

② FC越後妻有サッカーチーム
女子サッカー選手が棚田の担い手として移住・就農し、プレーする農業実業チームである。大地の芸術祭から派生した本プロジェクトは、プロとしてサッカーをしながら、里山で暮らすライフスタイルの提案であり、過疎・高齢化で担い手不足の棚田を「まつだい棚田バンク」を通して維持する、日本全国見渡しても類を見ない、FC越後妻有の先駆的なプロジェクトである。全く新しい地域づくりの試みでもある。サッカーを通じて地域とのかかわりを模索する選手たちは、同時に地域に新しい価値を見出し多様な幸せな働き方、暮らし方を模索していく。

地域の自然資源を活かした芸術活動

① 胡藝航、《日本の地域芸術活動現地調査ファイル》:「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」・インフ

ォグラフィックデザイン、紙にインクジェットプリント、1118mm・1508mm、2枚、2024年。



BEPPU PROJECT

BEPPU PROJECTは、大分県別府市を拠点とするアートNPOである。2005年の設立以来、現代芸術の普及、フェスティバル開催、地域性を活かした企画、人材育成など多様な事業を展開してきた。アートを通じて人々の創造性を喚起し、地域の魅力を引き出すことを目指している。この取り組みは、文化的価値の向上と経済的活性化を両立させ、アートを活用した持続可能な地域発展のモデルを提示している。BEPPU PROJECTは、創造力を未来への重要な資源と捉え、アートの可能性を広げながら、魅力ある地域づくりに貢献している。

Manifesto〈別府宣言〉

BEPPU PROJECTは、大分県別府市を活動拠点とし、この町とアーティストが繋がっていくための必然や場をつくる非営利の活動団体である。用意された空間ではなく発見した場所、アートという見る人によって多面化する要素が密接に関係を持つとき、それらは自らの枠を越え、閉じられた地域性から解放されるだろう。その団体が創り出そうとしているものは、さまざまな何かが出会う場所である。

地域への愛着と探求心を育む

まちの記憶に会いにいく

別府地域の通りにアートサイン(看板)を設置し、通りの命名と地域の物語を表現している。2005年の半年間のフィールドワークで収集した情報を基に、52枚の珪藻看板を制作・設置した。老朽化した町や町の変貌を新たな文化的財産として位置づけ、訪れる人々に独自の物語を想像させる機会を提供している。

Platform制作事業

別府市中心市街地の革新的な活性化を目指す取り組みである。本事業は、空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図るものである。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。

別府現代芸術フェスティバル混浴温泉世界

「混浴温泉世界」は、大分県別府市で開催された現代アートフェスティバルである。このイベントは、文化芸術を通じて地域の魅力を全国に発信し、別府市の活性化を図ることを目的としている。国際的に活躍するアーティストが別府のために新作を制作し、市内各所に展示することで、観客は作品を巡りながら地域の魅力を再発見する機会を得ることができる。

HISTORY

2005年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。

2006年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。

2007年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。

2008年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。

2009年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。

2010年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。

2011年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。

2012年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。

2013年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。

2014年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。

2015年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。

2016年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。

2017年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。

2018年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。

2019年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。

2020年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。

2021年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。

2022年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。

2023年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。

2024年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。

新たな協働形態の創出

ベップ・アート・マンス

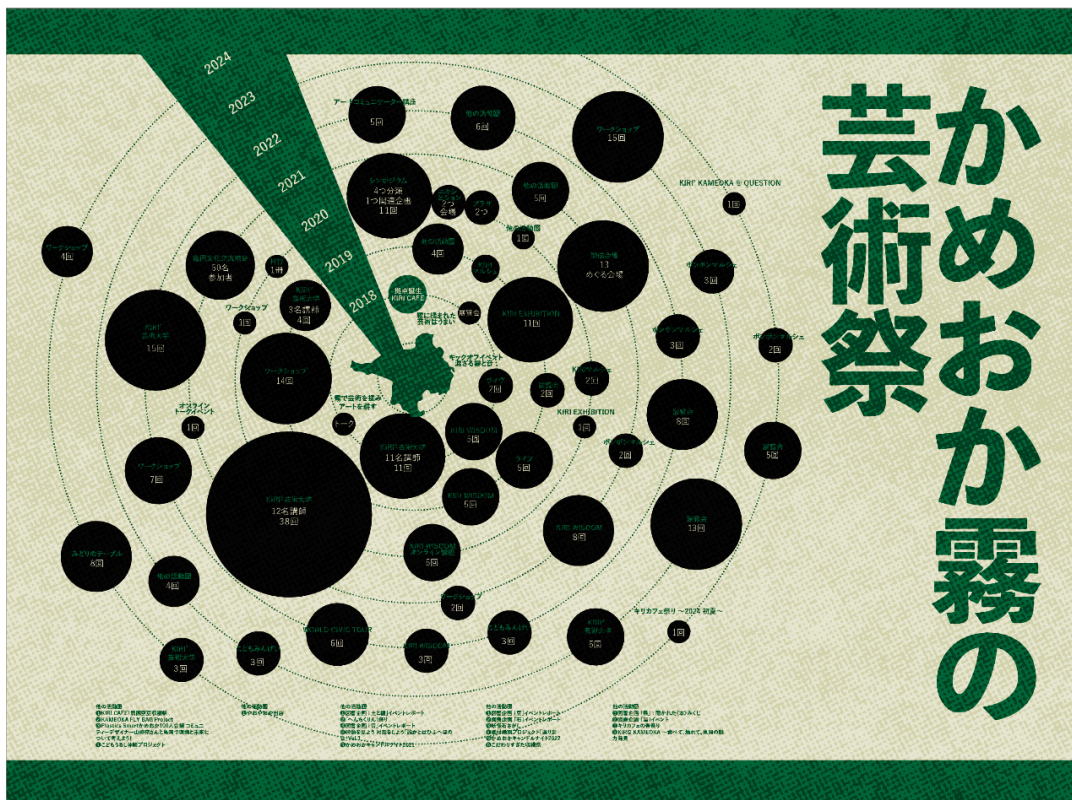
別府では、市民による多様な文化的活動が盛んに行われており、それらを集約して「ベップ・アート・マンス」と呼ばれている。本活動の特徴は、企画内容の相談から広報協力、事務局業務代行に至るまで、イベントの企画立案から実現までの広範なサポートを提供することにある。これにより、市民の主体的な参画と小規模文化団体の育成を促進し、最終的には別府市における文化芸術の振興と活力あふれる地域の実現を目指すものである。ベップ・アート・マンスは、別府市の文化的活性化と市民参加型のアートイベントとして重要な役割を果たしていると言える。

2020年以降の主な活動：

- 2020年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。
- 2021年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。
- 2022年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。
- 2023年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。
- 2024年「混浴温泉世界」開催。別府市中心市街地の空き家や施設を文化交流施設へとリノベーションし、従来の小売集積地から創造産業の集積地への転換を図る。主たる目的は地域の人材育成と交流の場の創出であり、若者や創造者のまちなか居住と店舗展開を促進することで、次世代の町づくりに貢献する人材を集積することを目指すものである。

地域住民主導による芸術活動

① 胡藝航、《日本の地域芸術活動現地調査ファイル》：「BEPPU PROJECT」・インフォグラフィックデザイン、紙にインクジェットプリント、1118mm・1508mm、2枚、2024年。



KAMEOKA KIRI ART CULTIVATION

かめおか霧の芸術祭は、亀岡市民に提供される亀岡名物の「霧」を象徴として捉え、たくましく「野良」の芸術を2018年から育てるそんな四季折々の美しい風景に出会える「トカイナカ」としての亀岡に魅了され、活動されている多くの芸術家とともに、人と地域の魅力を育て、亀岡一帯を驚きにあふれた芸術祭へと変容させる。

HISTORY

2018年 KIRI CAFE 1回（亀岡市美術館と共同で開催）
2019年 KIRI WISDOM 1回（亀岡市美術館と共同で開催）
2020年 KIRI CAFE 2回（亀岡市美術館と共同で開催）
2021年 KIRI WISDOM 2回（亀岡市美術館と共同で開催）
2022年 KIRI CAFE 3回（亀岡市美術館と共同で開催）
2023年 KIRI WISDOM 3回（亀岡市美術館と共同で開催）
2024年 KIRI CAFE 4回（亀岡市美術館と共同で開催）

活動拠点

①「KIRI CAFE」かめおか霧の芸術祭の発祥地として、カフェ、展覧会、マルシェ、ワークショップなど多様な活動を展開。
②「開かれたアリエ」：カフェ、コワーキング、図書室、展示スペースなど多機能な空間で、市民の交流・イノベーション創出を促進し、SDGs推進を目指している。

住民との結びつき

こどもみんげい

こどもみんげいは、亀岡地域の多様な人々が集まり、地域の自然資源を活用した長期的なプロジェクトであり、参加者が協議し共同で創作を行うものである。各参加者の視点を尊重し、自由な発想を促進する場を提供している。従来の授業形式を採用せず、子どもたちの興味や行動の自由を重視し、多様な交流を通じて、試行錯誤から生まれる発見や疑問を大切にしている。本活動は、子どもたちの創造性育成と地域文化・自然との結びつき深化に貢献している。この取り組みを通じて、未来を共創する仲間を増やし、持続可能な循環と環境の構築を目指すものである。

KIRI マルシェ

アートの視点で「つくる」「食べる」を体験できるマーケットである。美味しいご飯やおやつを楽しみながら、アートの展示や、ワークショップ、お買い物を楽しめる。亀岡市内や京都府内外から集まる作り手と出会い、実際に話をしながら手へとものづくりがながる学びと創造のマーケットを目指す。

持続可能な亀岡へ

地域課題を解決するために、芸術祭を軸とした循環的な経済圏（エコシステム）を創り出す。アートの力を活かしてマルシェ・農業・食・観光・環境などが有機的に結びつく。循環的な地域の未来像を楽しみ、分かりやすく、形にして発信する。

基礎情報

亀岡エリアの基礎情報
人口: 85,352人 (2022年)
面積: 224.8km²
京都駅まで: 30分 (電車)

通年で開催される市民参加型芸術活動

開かれたアリエ公衆
みどりのテーブル
図書コーナー
KIRI FARM
ボンボンマルシェ

① 胡藝航、《日本の地域芸術活動現地調査ファイル》:「かめおか霧の芸術祭」・インフォグラフィックデザイン、

紙にインクジェットプリント、1118mm・1508mm、2枚、2024年。



② 胡藝航、《中国貴州ヤオグ村印象》インフォグラフィックデザイン、紙にインクジェットプリント、1118mm・

3000mm、1枚、2024年。



③胡藝航、《私の目に映るヤオグ村一日常生活環境を再発見する》立体作品、ダンボール・ビニール、2000mm×2500mm×300mm×300mm(サイズ可変)、4個、2023年、個人蔵、論者撮影。

④ 胡藝航、《私が発見したヤオグ村ー生活経験で再体験する》インフォグラフィックデザイン、紙にインクジェットプリント、1100・3200mm、1枚、2023年。

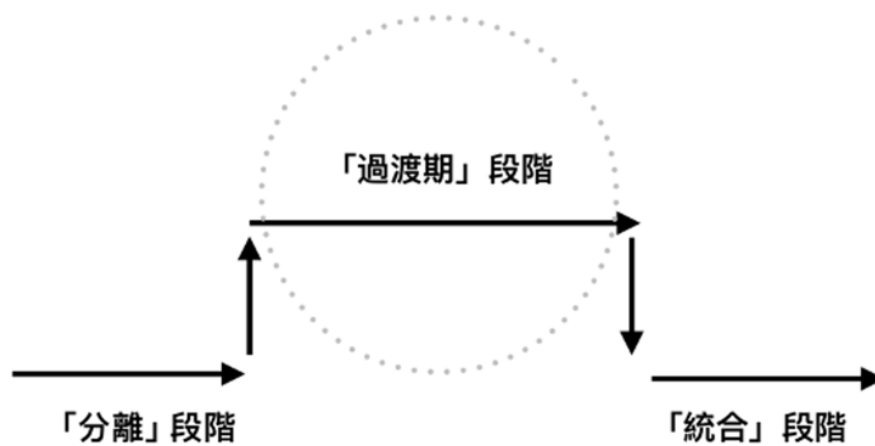


⑤胡藝航、《地域における生活リズムの再構築を目指す芸術活動の研究—活動開催記録》映像ビデオ、時間:1分 50 秒、2023 年。

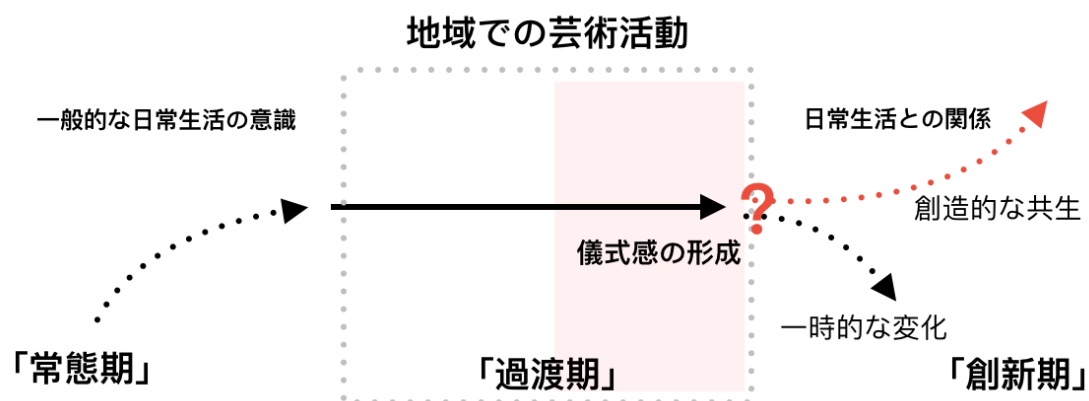
図版一覧

- ① 「ファンヘネップの通過儀礼理論」筆者作成
- ② 「地域芸術活動における儀式感の形成過程」筆者作成
- ③ 活動スローガンを掲げたチームメンバーの様子
- ④ 筆者が尧古小学校にて地元住民と交流し、ヤオグ村の一般的な動植物について議論する
- ⑤ QQFが地元の子どもたちに、彼らの印象に残るヤオグ村の動植物を描くよう指導している場面
- ⑥ 活動中、地域住民が村の石や木板を利用して絵画を制作している様子
- ⑦ 地域住民とQQFが村の廃材を活用し、特徴的な建築モデルを制作する様子
モデルに装飾的な絵を描く過程も含まれている
- ⑧ 左は「郷土の新発見」ヤオグ村初の芸術共創展覧会のポスター、右は本活動で創作された作品の一部展示
- ⑨ 住民が自作の作品を村の各所に配置している様子
- ⑩ QQFと地域住民が絞り染めの製作工程について意見交換を行う様子
- ⑪ QQFと地域住民が古法造紙（竹紙づくり）の製作工程について意見交換を行う様子
- ⑫ 地域住民がオンラインイベントに参加している様子
- ⑬ オンラインライブ配信時のスマートフォン画面

図版：



(図1)「ファンヘネップの通過儀礼理論」筆者作成。



(図2)「地域芸術活動における儀式感の形成過程」筆者作成



(図3) 活動スローガンを掲げたチームメンバーの様子。筆者は右から5番目。



(図 4) 筆者が尧古小学校にて地元住民と 交流し、ヤオグ村の一般的な動植物について議論する



(図 5) QQF が地元の子どもたちに、彼らの印象に残るヤオグ村の動植物を描くよう指導している場面



(図 6) 活動中、地域住民が村の石や木板を利用して絵画を制作している様子



（図 7）地域住民と QQF が村の廃材を活用し、特徴的な建築モデルを制作する様子。モデルに装飾的な絵を描く過程も含まれている。



（図 8）左は「郷土の新発見」ヤオグ村初の芸術共創展覧会のポスター、右は本活動で創作された作品の一部展示。



(図 9) 住民が自作の作品を村の各所に配置している様子。



(図 10) QQF と地域住民が絞り染めの製作工程について意見交換を行う様子



(図 11) QQF と地域住民が古法造紙（竹紙づくり）の製作工程について意見交換を行う様子



(図 12) 地域住民がオフラインイベントに参加している様子



(図 13) オンラインライブ配信時のスマートフォン画面

発表論文リスト

「触媒としてのデザインによる地域活性化:貴州での事例検証を踏まえて」『京都芸術大学大学院紀要』3号、2022年、pp. 223～234。

「共同体の構築における芸術活動の機能:ヘラーの日常生活論を参考に」『京都芸術大学大学院紀要』4号、2023年、pp. 139～149。

「地域共同体の新たな構築における「儀式感」:大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレを参考に」『京都芸術大学大学院紀要』5号、2024年、pp. 203～214。